

新 譯

ヤセ・スケシ

笹山準一著



發行所

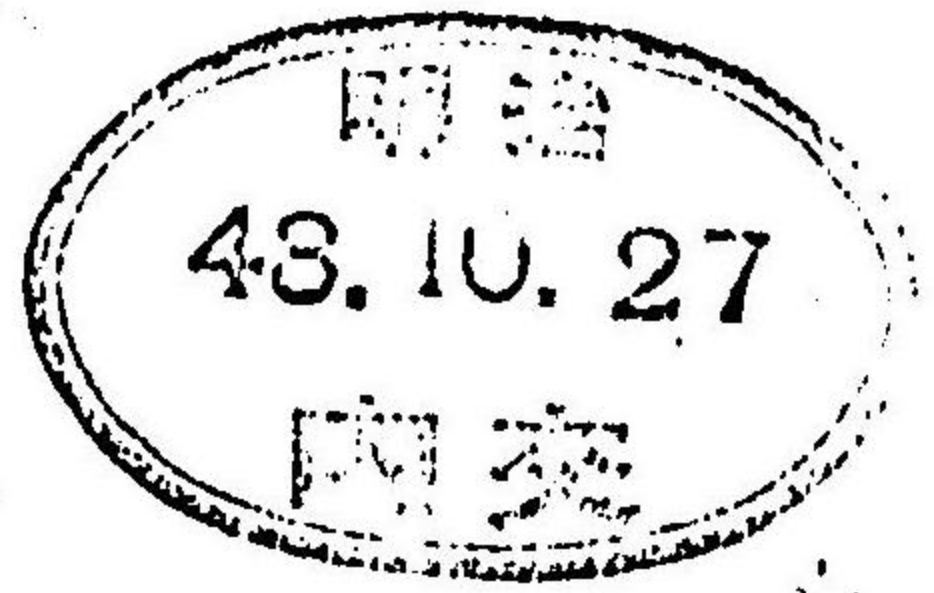
精華堂書店

96-559



新
譯

シ
エ
ク
ス
ピ
ヤ



明治
48.10.27

内務

9
9

はしがき

沙翁は到底無靈感なり。秘庫なり。とは千百の沙翁學者が等しく絶望的に發するの語である。逡巡して三百年。世界の思索家は何れも不斷の努力を致して渠の研究に餘念ないけれどし。未だ一人の善く渠の秘鍵を奪つて其の秘庫を闡明し得たる者もない。渠は到底秘庫である。無靈感である。今や我邦に於ても眞摯なる沙翁研究者輩出して其傑作の完全譯を企つる者さるあるに至つた。巷間の童輩。口を開けば沙翁を談する。また宜なりである。が我邦に於ける沙翁研究には未だ餘地がある。此の時にあたつて渠の傳を紹介するはあながち徒勞でもあるまい。たゞ渠の傳は當時渠の先輩として劇壇の主權を握つたジョンソンの傳の明確なるに反して到つて曖昧である。依つて吾人は多くの先輩諸學者の說を參照して最も慎重に渠の面影を採へんと努めたのである。敢て巨人を仿倣せんとするものではない。渠に憧るゝ者に對して多少にても益する所あれば著者の幸である。碌々たる小冊子。盡さざる点は多い。讀者幸に之を原せよ。

凡 例

△本書は沙翁學者、先輩の書を參酌して最も眞摯に其の面影を紹介せんとしたものである。

△本書を著はすについて参考にしたのは

エツクット著 キヤラクター、オブ、シエークスピアプレース。

ローレンリツデ著 レクチユア、エンド、ノーデス、オン、ゼ、プレー

ス、オブ、セクスピア。

ドーデン著 セクスピア、ビズ、マインド、エンド、アート

全 著 イントロデクチョン、ツ、セクスピア

等を初めホーリウエル、リー、フリエー、ブランドス其他の著書を引照した。

△本書に於ては沙翁の傳と共に諸作物について其の梗概を紹介につとめた。蓋し沙翁に對し大体の知識を得んとする者の爲めには好伴侶たるを得んか

目 次

第一章 沙翁の生涯

- (一) 歐樂の世界……………エリザベス女王の治世……………一
- (二) 繪の如な田舎村……………アボン川畔沙翁の生地……………七
- (三) 搖籃の夢……………沙翁の家庭……………一一
- (四) 儼かなる教育……………貧民學校時代……………一六
- (五) 戀女房……………アン、ハザウエーと結婚……………一九
- (六) 村の若い衆……………盜鹿……………二五
- (七) 漂零の遊子……………ロンドン行……………三〇
- (八) 蟄籠……………馬番となる……………三五

(九) 希望の曙光……………志緒につく……………三七

(一〇) 先發の嫉妬……………グリーンの嘲罵……………四一

(一一) 遊蕩の才人輩……………當時の作者……………五〇

(一二) 苦闘の産物……………初期の作物……………五四

(一三) 戀の王國……………沙翁の戀物語……………六〇

(一四) 有爲轉變の世……………恩人の悲惨なる最後……………六八

(一五) 人生の呪咀……………悲劇創作……………七四

(一六) 豁然大悟す……………傳奇劇時代……………八四

(一七) 荒蕪たる都市生活……………望郷の念起る……………八八

(一八) 追憶多き自然……………故山に退隱す……………九四

(一九) 悲惨なる晩年……………退隱後の沙翁……………九九

(二〇) 詩星墮つ……………沙翁逝く……………一〇五

第二章 沙翁之作物

(一) 吾等の紀念……………其の作物……………一一二

(二) 修養時代の院本……………第一期の戯曲……………一二三

一、 沙翁の改作…………………………一二五

 タイアス、アンドロカス。

 ヘンリー六世(第一篇)

二、 初期の喜劇…………………………一二六

 ラヅス、レーボアス、ロスト

 ロメデー、オブ、エロアス。

ヴェロナの二貴人

眞夏の夜の夢

三、 初期の史劇……………一二八

ヘンリー六世(第二、三篇)

リチャード三世

四、 初期の悲劇……………一二九

○ロメオ、エンド、ヂエリエット。

五、 中期の史劇……………一五二

リチャード二世

ジョン王

(三) 得意時代の院本……………第二期の戯曲……………一五五

一、 中期の喜劇……………一五六

ヅエニスの商人

二、 後期の史劇……………一六四

ヘンリー四世(第一、二篇)

ヘンリー五世

三、 後期の喜劇……………一六六

ターミング、オブ、ゼ、シユルー

メリー、ワイヴス、オブ、ウインヅル

マツチ、アツ、アバウト、ナツシング

アズ、ユー、ライク、イット

第十二夜

オールス、ウエル、ザット、エンツ、ウエル
 メジニア、フォア、メジニア
 トロイラス、エンド、クレツシダ

(四) 思索時代の院本……………第三期の戯曲……………一七一

一、 中期の悲劇……………一七四

ジエーリアス、シーザー
 ムムレツト

二、 後期の悲劇……………一八二

オセロ
 ワーア王
 マクベス

アントニーとクレオパトラ

コリオラナス
 タイモン

(五) 悟脱時代の院本……………第四期の戯曲……………一九〇

一、 傳記劇

ペリクリース
 シムベリン
 ラムベスト
 ウインターズ、チール

二、 断片……………一四九

ツー、ノーブル、キンスメン

ヘンリー八世

(六) 其の他の院本……疑問の戯曲……………一九六

アーデン、オブ、ウキーヴァーシヤム

外十餘篇

第三章 沙翁の生命

(一) 百鍊千磨の神鏡……………二〇二

(二) 時代の先覺者……………二二三

目次終

新釋シェイクスピア

笹山狂浪譯

第一章 沙翁の生涯

第一 歡樂の世界 (エリザベス女王の治世)

第十四世紀以降の歐洲人士の眼界は漸く開けて來た。第十五、六世紀になつて國家的盛衰畧成ると共に社會的の進歩は人智の大發展を招くに至つた。それが内に結んでは文藝の復興、諸種の發明と爲り外に發しては海外の遠征、殖民通商の隆昌を來した。憊うして中世の暗かつた夜は仄々と明けて華やかな近世の朝は麗はしい光に輝き出した、即ち天文學醫學藥學の發達より法政哲學の進歩に次で各國

の文華は一時に開いた。實に文藝復興の流に棹す南歐藝壇の春は絢爛を極めた。古來多くの詩人と墨客とが憧れの種となつた美しい伊太利の自然は此時トルクアト。タツソを生じた。タツソは希臘古詩の醇と中世傳奇風の妙とを兼ね。ホメロス、キルギリウスの統一と調和に功をなした。西班牙と葡萄牙との文學は詩と戯曲であつたがアルカデア、ドラゴニカ等二千餘篇の作ありと唄はれてゐる。ロペデゼガが出た。西班牙戯曲を大成した人にカルデロン。デ。ラ。パルカといふのがあつた。ミグエル。ドセルワンテス。サアデドラは有名なる、ドン。キホーテを著して今も噴々の名聲がある。佛蘭西にはフランソア。ラベレイ出で、文藝復興時代の調を代表し。名士三百人を焚殺して虐王のメリーの名に一代の志士を戦慄せしめたる蘇格蘭女王の眷遇を享けて希臘羅甸の風格を擬した詩人にビエール

ロンザールといふ者があつた。斯様に賑かな過渡期に於ける大陸の藝壇の影響が一輩の水を隔てた英吉利に波及せずして止むだらうか地中海の浪は英海の濱に續いてゐる。大陸の風は野葡萄香るフランスを吹いて此處にも戦がすには居らなかつた。英國詩壇の父祖チオーフレ、チョーサー逝いて百六十年英吉利の文野も亦春廻り來てエリザベス朝には詩華爛熳の艶美を競ひ咲くのであつた。處女王エリザベス英邁の資を持して國民に擁立せらるゝや三十九條目を布いて抵抗派の教義をたて、英吉利教會の設立を固くし。トロア條約によつてフランスに勝ち。西班牙の無敵艦隊を破つて海上權を奪ひ、四十五年の治世善く父王ヘンリ八世の遺業をなした。處女王がメリーを誅してから后は實に外交多事であつた。がそれは頓て

國力の膨脹發展を意味したもので康平打ち續く内には文物典章の彩華が當代の國民を酔はして近代の明るみへ段々に引き出される市民の心には言ひ知れぬ怡樂が湧いてきてそはつかずには居れない如き氣持ちになる。見るもの聞くものが何れも華やかな若々しい輝きに現世の悅樂を叫ぶので暢達とした心に映る世界は歡樂の巷としか見えなないのであつた恐ろしい苦しい切ない重つたるい夢から醒まされて汚れた暗い面は拭はれた人間は浮かれて騒いで輕操でをる世の中を見てツツトリと夢心地に酔はされずには居られない。他愛もなく歡樂に酔ふては緘黙たる口も自と綻びて楽しい歌は天樂に合せて其處から奔走出る若やいだ心臓の鼓動は速くなつて湧き返る紅の血は強い力を有つて耳目に觸る、萬象を美化して終う。恁うして現實の甘き味に囚はれた人間が地の香に憧れて儚ない幻の影を追ひ惑ふ、

てゐる。零落と衰亡とが濼い姿態に警醒の喇叭を吹きたてる迄は罪禍も花と微笑むで見え、現世も樂園の住心地である。空なる影を追ひ疲れた人間は藝術の花圃に迷ひ込むで其處に麗はしい慰樂の宿を免める。此の時に眞實の崇潔き涙に文華は培はれ育まれる虚偽の姿は没却て其處には人生痛苦の純潔なる實を味ふことが出来る、活力内に充ちたエリザベス朝の英京の藝壇に百花燎亂れて彩華輝き渡つたは怪しむに足らない。實に盛なりしはエリザベス朝の文學である學者としてはベーコン卿がある。詩人としてはミルトンがある。戯曲にはエリザベス初期に花を咲かしたマロー、グリーン。ピール。ロツジ。ナツシユ。キッド等所謂大學才子連がある。現世を飾る藝術の花圃に春濃にして百花綯繡として擾亂咲いた當代こそは現實の甘きに酔へる人にとつてはまたなき歡樂の世界だつたに違ひない。不朽

の大詩星が慧星の如く忽として英京の藝壇に光芒を顯はしたも實に此の時代である文豪カーライルをして「印度帝國は有も可なり無きも可なり。然れど吾人は沙翁無かるべからず。印度帝國は早晚去らん。されども沙翁は去らず。天長地久渠は常に我と俱なり。余は到底沙翁を捨る能はず」と叫ばしめたる千古の大詩人セークスピアは斯の如き時代に生れた人である。精華燦然たる此の詩星が光芒を仰ぎたる世界は如何に騒いだらう。今もなほ燦として焔く詩星の光芒を仰いで人は皆小さき胸を速く浪うたしてゐるではないか。あわれ歡樂の世界に詩神の寵遇優渥して人類は茲に不朽の大巨匠を得た沙翁は英國の誇りにあらずして人間の誇りである。エリザベス朝の光輝にあらずして實に永遠に全土の光榮である。

第二 繪の如な田舎村 (アボン河畔沙翁の生地)

黙示に富める自然よ。神蹟豊なる田園よ。麗はしくも亦嬌しきは田舎の情趣なる哉。吾等が人生の痛苦にエ耐へずして傷める胸を抱いて眺め平和なる自然の曠野に漂泊のとき冷黙の大宇宙は如何に宏大なる愛の慰樂を與へ給ふことかよ、麗はしく美しいのは田舎の静寂にして長閑けき眺めである。丘あり川あり森あり林あり廣い牧場に角笛の音をきく黄昏には野徑を急ぐ村娘の小唄もきかれる。繪の如に其處此處に點在せる佗しい茅屋から星の如な灯の洩れ来る夕は。里の小川に胸を洗ふて戀を夢みる若衆もあろう。花にも月にも夢の世界の田園に住む人心の質朴さは優しい情の親切に表はれて眞面目なる生活には虚偽の影だに認め

められない。誠や其處に不斷の努力と勤勞に汗する人は幸福なことである、が虚偽と輕薄とを飾る無風雅な文明の濁れたる風は時代と共に此處にも吹き荒むで物騒な音たてゝ、氣觸な人間の數も殖えて来て口惜しや行く處。田園の神聖は汚濁され其の美觀は破壊されつゝある。けれどもそれは矢鱈に文化の仇なる外觀を誇る現代のことで數世紀の昔は何地へ行つても詩の姿、歌の姿、田舎は純なる神の領に屬してゐた。

倫敦から徒歩へば三日泊りで達ける片田舎、英京より愛蘭土への道筋に當るワキツク州のストラッドフォードは今でこそ煙筒の煤煙も飛んで来ようし、種々な建築の數の殖ゆると共に美しい花の數は減たろうけれど。嘗ては面白い傳説や物語に富める靜かなる美しい田園として住民の夢平和なる桃源であつたのだ。

太古の寂寞に崇嚴の姿を保つて汚濁を許さなかつたアーデンの森は深うして靈精宿る老樹神木の間には天使の舞樂怡盪として聞えた頃森の彼方を遠く展いた蒼茫たる野原を斜に横切つたアボンの河は潺々たる流れ清うして両側の岸には美しい奇麗な草花が耕さず紡がねど優しく咲いて居た春は吹かい風が萌ゆる緑の野を道じて夢の如き流れに憧れる純き處女の戀を誘ふただろうし秋は搖落の悲曲に繪に見る如き里の小橋に佇む惱める若人の胸を傷めて白い流に紅の怨を流したろう哀れなる謠、悲しい曲調は邪氣ない乙女の清き聲に唄はれ多恨の若者が紫の愁を如何に深からしめたるう

其の美しい自然は思出多き歴史上の事蹟にも富むでゐた。廢墟の古城趾には鳥啼く夕蒼い星が流れたろうし。菩提樹繁る塔に月落る夕は梵鐘陰に籠つて牧童に追はれて歸る牛の懶愛き鳴聲にも恨はいと

い長かつたろう。
 吾等が渴慕する不朽の大詩星は處女王エリザベス即位の數年後。即ち對岸の大陸フランスにはユグノーの騷亂鬧なる千五百六十四年蘇國の春未だ寒き四月の二十三日に風薫するストラッドフォードの此の景勝に勇ましい産聲を擧げたのだ。
 アーデンの森に天樂起つてアポンの流は此の日は早かつただらう。
 楡の林に鳩群り下りて紫の雲はストラッドフォードの空に蹶びたるう。菩提樹香るストラッドフォード寺院の塔に星輝いて花美しの野に天使舞つてたかも知れぬ。東の博士乳香沒藥を携へてこそ來なかつたけれど世界は此の日瑞氣に充たされたに違ひない。萬軍の主は全土の民に大なる紀念を與へ給ふて茲に人類は大なる誇りを得ることになつたのである。

第三 搖籃の夢 (沙翁の家庭)

至上全智の神が祝福豊にして撰ばれて人類至大の光榮を與へられたるセークスピア家とは如何なる家庭だつたらうか。
 金殿玉樓の春を羨むは人情の常である。銀鞍白馬の貴公子、綾羅錦繡の美姬が幸運を唄ふは凡俗の慣習である。空なる豪奢と儂なき幸運に憧れて憂き身を窶す下界の子を神は憫み給ふ。人生の春速に逝き晩れて夏の夜の夢は醒め易いが。大悲の神が御恵は變らざる處に優握である。忠實なるスダヤの一大工が家には精靈充ち給ふて純潔なる村娘マリアの身は七彩の瑞雲に被包まれた。それより一千五百六十四年。蘇國の片田舎ストラッドフォードの一商人の家に神は奇蹟を現はし給ふた。

ストラッドフォードを距る三哩の處にスニツターフィールドといふ處がある。其處に地方紳士の後裔でリチャード・セークスピアといふ百姓があつた。其の子のジョンといふのは即ち大詩宗の父である千五百五十二年四月の記録によると其頃己にジョンはストラッドフォード、オン、アボン市のヘンリー町に住居してゐた。此處では手袋や大麥を商なひ。傍ら肉屋もやつて生計をたてゝたこのことだつたが千五百五十七年にジョンは市吏に選舉せられた。其の年の秋になつてウイルムコットの素封家ロバート、ウアーデンの季女メリーと結婚をした。新婦メリーは田地若干を持參したからジョンは茲に初めて生活に餘裕を生じ商賈をも擴張して盛大にするようになった。其の後幾ばくもなくしてメリーは二女は擧げたが何れも夭折した。其の次に生れたのが即ちウキリアム、セークスピアである。ウキ

リアムは實に千五百六十四年四月二十三日（記録によれば沙翁の受洗した日は千五百六十四年四月二十六日になつてゐる。處が當時の習慣として普通小供の生れた時には生誕后三日を経て洗禮を受けるのを常としてゐたから、そこで此の日に定めたのだ）にメリーの胎を出でたのだ。而し星を占ふ博士もなければ呱呱の聲を聞いて此の兒の前途を卜する預言者もないのでウキリアムは世間並の小供として大きくなつたのだ。

父のジョンは公共の事業に熱心であつた。衆に盡すの熱心は頓て世間の人望を集める因となつて段々と昇進した。デ千五百六十五年には市長老に進み、六十八年には市の最高官たる代官に迄なつた。が一年にして之を罷めた。其時は少なからず市民に愛惜されて種々な賞典を領するの榮譽を荷ふた。七十一年には長老長となつたが七

十五年頃から家道漸く傾いてきた。所有の土地は之を典し。或は賣却するといふ有様で日一日衰退して逝く家運はまた如何とも仕方がなかつた。恁奈具合で衰れなる末路を急ぐデヨンは九十二年頃まではそれでも兎に角に細き煙を立てゝゐたが其後は情ある人の庇護の下に恨多き月日を送つた。而して千六百〇一年の九月、桐の一葉に秋たちて露に啼く唧々たる蟲の音身に泌ひ夕。半生の哀史を残して平安の床に永き眠に就いた。

母なるメリーは由緒あるアーデン家の娘である。其の祖先は一代の名主アルフレッド大王に出づと傳へられてゐる、家柄の田舎の舊家に育つたメリーは優しい美しい母であつた。ウキリアムの後にアン、リチャード、エドマンドの一女二男を擧げた。薄倅の夫を扶けて可憐なる四人の小供の教育に如何に心を用ひたことだろう、情深い

其の眼には涙が絶えなかつたろう。温雅なる其の面には愁の痕深く刻まれて結ばれて解けぬ色褪せし唇から漏れる哀れなる音楽は如何に小供の耳には悲しい調べをなしたろうか。嬢様で育ち奥様で通した憐れなる女が零落の黒き影に襲はれた時の涙に育つた小供の前途はごうなるだろう。不運の良人の病牀に侍して運命の悲惨に泣いたメリーは淋しい涙多き七年を送つて千六百〇八年にデヨンの後を追ふた。

沙翁の家庭は斯の如く悲惨なものであつた。其の父や。其の母や。何れ幸運の星に呪はれたる身の得意時代は長からずして涙は袂に絶えなかつたのだ。されば詩人が搖籃の夢は早くも人生の風浪怖ろしの暗きに驅つてたかも知れない、父の愁、母の涙、彼は人生の苦き味を幼い時に既に嘗めたるう。美しき自然の輝く朝若き希望に胸を

躍らした詩人は。アーデンの森黒ずんで見ゆる夢の如き夕、アボンの河畔耐へやらの哀愁を抱いてさすらつたかもしれない。后年に於ける詩人の作物について吾等が深刻なる印象を繰り返して深く之を味ふ時に沙翁が死ぬ迄忘れ得なかつた搖籃の夢の濃なる姿を偲ばすには居られないのであつた。

第四 僅かなる教育 (貧民學校時代)

父は一介の小商人であつた、母は田舎富農の嬢さん育ちだつた。たとへ父は後に市の名譽職に擧げられたとはいふものゝ里を洗へば腕一本で實直に稼いでた市民に過ぎない。傳ふる所によれば父も母も自己の姓名さへ書き兼ねたそうだから何れも文筆に因縁乏しかつたことは歎である。然れば其の家庭教育も想像で見れば心細い限りで

あつたらう。が父も相當に時代を解して見れば道に最愛の兒を文盲で終らすには忍びなかつたらう。彼は初めて市の貧民學校に送られた學校といつても當時のことだから不完全至極のものだつた。其處では主として拉丁語學を教授したものだ。初等文法から進んでセネカ、テレンス、シセロ、ゾアデル、ブラウツス、オーグイド、ホレース等の書を誦讀し、なほ有望な小供には希臘語の初歩を教へてた。沙翁は其處で古文學の初歩を授かつたのだ。而しそれも僅の間に過ぎなかつた。零落の暗き影が父の家を被ふて。人生の風波が其の家庭を見舞ふた時。彼は學窓に安閑として居ることを許されなかつた未だ一人前の教育を受けない内に彼は書籍と絶ちて事業の人たらざるを得なかつた。中途にして學業と断ちたる詩人は陰翳家庭に母の悲痛をさながら佗びしい幾月日を送つた。父を扶けて種々

の仕事に惨めな生活を續けた。其の間に彼は何を爲したか記録の據るべきものがないから確には解らないが學校の教師をしたともいひ醫師の書生になつたともいひ。父を扶けて屠牛の業に従つたとも傳へてゐる。が何れにしても乳臭の年少早くも世路の險惡を辿らなならかつたのは明である。多くの傳記者が種々なる憶斷を下して彼是と多くの説は盈涌せるも其の父を扶けて處世の荒浪に乗り出したとより外は確でない。而し早くから憊うして運命の殘虐なる手に囚はれた彼は未だ純なる感情を痛くも刺激されて后年の作に與つて益する所の何物かを得たに違ひない。

人間の救主は三十年の間名も知れぬ勞働者の群に混つて父の業を扶けてゐた。不朽の大巨匠も亦憊うして片田舎の傳命少年として昨日も今日も孜々としてパンの爲めに油汗を絞つてゐたのだ。

ジョンソンをして「僅なる拉丁語と、より少なき希臘語」との冷罵を敢てせしめた憐れなる彼の教育は貧民學校の數年を以て終りを告げたのである。けれども美しき自然は温かき其の懷に此の傳伴少年を育むだ。淫溢し來たる時代思潮は世路の險難に惱める少年を押し流して其の適所に導かすしてやまなかつた。神は其の最も愛する所の兒を幾度か試練し給ふ。

第五 戀女房 (アン、ハザウエーと結婚)

ストラッドフォードの公文書上に洗禮を受けて後再び沙翁の名を見出したのは千五百八十二年である。彼は其の年の秋自分より八ツ年上のアン、ハザウエーと結婚をした。

彼の父はアン之父とは親しい仲であつた。彼とアンとは早くより往

來をしてゐた。二人は當時の風習によりて許嫁の仲である、多感の少年は自分より八ツ年上の美しいアンの手を執つて幾度か甘き戀に酔ふたに違ひない、が其の時分のウキリアムの家庭を考へてみると實に慘なものである。父のデヨンは借金の爲めに苦るしむである。生計は日一日と困窮に陥りつゝある、十九歳のウキリアムは精一杯稼いで居たが儲けは知れたものである、而も斯の如き。状態に在るを顧みずして二人の結婚の式は舉げられた。其處には何等かの事情の存在したに違ひない、アンは其の時八ツ年上といへば二十七歳である花の姿は過ぎかゝつてゐる年増である、女としては大事の時である其の上結婚後數ヶ月にして子供が出来たのを見ると、此の年増娘は未だ十九の許嫁のウキリアムと早くから熱い手に抱き合ふて心ゆく迄、強き肉の香に酔ふてたものと思はれる。尤も其の時代に於て

は許嫁を以て殆ど婚姻したのと同じに見做してたのだから誰憚らずに此の二人は若い血の躍るがまゝに濃かなる戀を讚美してたらしく考へられる二十七の娘は肉に飢えてゐる。たとへ許嫁の夫は定められてゐたもたゞ其次で満足は出来ない。心は一種の淋しみに襲はれて青葉若葉の影婆娑たる窓に凭つて夢の如な美しいアポンの流を眺めた時に思はず吐息せず居れない。晩れて逝く春の夕を獨り物思ひに耽る時分には哀しい想に次で何物をか使儀ような情が涌いて來てエ耐への怨が動氣を高める。其處へ十九になる白面の自分の未來の良人が訪ねて來る。多感の詩人が燃ゆる如な眼と見合はした時には遠がに羞しい眩しい感がして面を赧くせざるを得ない。羞し俯視て處女い容子に語少なく話の間に相手の若者は惱殺されて終つて不思議をハツませた、若い者の眼には女は凡て美しく映する。殊に満身

情に燃ゆる若い女の香を嗅いだときには血が湧き返つて胸が騒いで五体が怪しくも戦く、女は堪へられなくなつて黙して男の手に熱い接吻をする、若者の手は何時の間にか女の肩にかけられてゐて其の紅い唇は白い女の額に……二人は恁うして甘き蜜の如な戀に酔ふストラッドフォード寺院の塔に金星瞬く夕は菩提樹の下に若き男女は角笛の音にきゝ惚れたらう。廣い牧場の緑の草に露輝く朝は静なる自然にたゞ二人小鳥の如に面白く歌唱ひながらさすらつただらうエデンの昔薔薇の陰に蛇を呪はれたアダムとイブの如に搖蕩の春園けて巫山の雲千断れた時にアンの身は既に普通のものではなかつたが事情は纏綿して仲々に結婚を急ぐべくもない。戀には老せた十九のウキリアムも處世の難衝には躊躇ざるを得ない。浮世の風波と戦つて見ん事人生の大洋を押し切るだけの腕に覺えがない。酸れかゝ

つた父の船は頼るべくもない。身一ツを投げ出されても荒い世湖の渦巻きに巻き込まれずには濟まされそうにもない身でどうして妻が養へようかアンが肩で息するのを見ては怎奈ことを考へて居れない其上アンの家からは早く〜と急いで来る。ハザウエーの家は相當な暮をしてるから其處には何とかの話もあつたのだらう。高砂や尾上の松の千代かけて目出度青海波唄ひ收めることになつた。翌年の五月にアンはスーザンナといふ。女の子を産むだ。千五百八十五年の二月にはハムネットヂユデイサといふ。雙兒を生むだ。今は戀の夢から醒めて二人の子の父となつたのである。彼が戀女房アンの性質については兎角の評がある。が野に在る花は美しいけれど手に執れば頓ては凋落する。垣間見た薔薇は艶麗だけれど其の香に酔ふて爛れると刺がある。世話女房になつたアンは果

して詩人に疲れたる心を慰める丈の資格があつたかどうが疑はしい
 偶の逢瀬に嬉しかつた口説も古女房の口からさかされる嫌氣がさ
 す。無理な首尾して忍び逢ふ折は濃な年増の戀の優しさが身に沁む
 で嬉しく樂しかつた。然るにうけれどガタつく斗櫃の音に氣を揉むよう
 なつてはそれも五月蠅くなる他愛もなく笑ひ興じ、戯れた時分には
 戀ほど面白いものはなかつた。人の兒の親となつて騒々し
 い啼聲に折角の夢も破られること度重るに至つては却つて悶への種
 ともなる。アンなる女が如何なる女であつたかは。知る由がない
 が沙翁の遺言状により。或は戯曲の章段より想像を下す時には華や
 かな若者の夢は間もなく醒めて美しい戀の色は頓て褪せ。二人の間
 にいぎたない争の絶間のなかつた。うとも思はれる。
 自己よりは入つても若い良人に對するアンの態度が世にありふれた神

経質の奸妬な女のそれに類してたではなかつた。うかと考へてもみ
 る何れにしても餘り幸福な仲ではなかつたらしい。

第六 村の若い衆 (獵獸苑の鹿を盗む)

沙翁の父が未だ市の代官を勤めてた頃のことであつた。父ヂヨンは
 代官の資格を以て當時一般に卑賤なものとしてゐた旅隊の俳優を招
 いて開演せしめた。其後それは永らくストラッドフォードの慣例となつた位だからヂヨンの芝居好きだつたことは想像され
 る。當時の演劇といつたら大陸思潮の輸入と共に外國戯曲の翻譯に
 劇壇の趨勢漸く混沍として曙光未だ暎かならずといつた時分、田舎
 廻りの旅役者などは靈異劇や道德劇を演つて人氣を呼びたものだが
 小供心の沙翁もヤンヤの人氣に浮かされてよく見物にいつたに違ひ

ない。時にはコヴェントリーの方まで。出掛けて他愛もなく面白がつてたろうと思はれる。そうして居る間に青春の夢のような空想の翅は擴げられた今迄は矢鱈に野次つてた者が何時とはなしに自分もならば役者になつて派手な氣儘な生活をしたいなごの考も起つたろう其の内には役者の一人二人と話をする機會も捕へる。樂屋の様子も知つて来る。愈々若い血は沸いて肉は躍るといふ有様で。次第々々に其の道の嗜好に傾いて來た。と、もう矢も楯も堪らなくなつて前後の分別も何地へやら儂ない望に牽かされてロンドン行の動機を一層強くしたろうと思はれる。

遠慮會釋のない歲月は早瀬をなして流れる。何の彼のといつて居る間に脊丈も伸びて來る。自然は永劫に若いけれども人間は日一日と老けて來る、沙翁も其の譬に漏れずして通れ一人前の村の若い衆となり澄ました。

後年の彼は温厚な紳士であつたけれども客氣盛んなるウキリアムは何日か若い衆の仲間入りをすると共に野次馬の跳つ返り随分と面白も爲てのけた。何地でも若い者の間には餘り賞められない一種の慣習があつて碌でもない惡戯をやつて面白がつてゐるものだ。日本に於ても田舎へ行けば林檎畑や柑橘園を荒してみたり。田五作さん處の裏の柿を盗むとか筈をせしめて來るとか八公熊公の畠の大根や芋を掘り返す位はまだしも甚だしきに至つては。鶏や家鴨を盗むで手柄顔に誇るのを社會では若者の腕白として左程に咎めもせぬなどの怪しからぬことがある様に當時の英國では牛津の學生などは久しい間恣奈風な惡習慣を續けてた位で餘り罪なことゝも咎めたてせなかつたのであるからストラッドフォードの若い衆もそんじよそこの何

や彼と荒し廻つて陰かに快としてゐた。ウキリアムも其の群に投じて若氣の悪戯から獵獸苑などを荒らしたらしい。鹿が當時の法律では獵獸苑を荒らして鹿等を盗むと三ヶ月の禁錮と損害三倍を賠償の刑に處するといふことになつてゐた。が若い者は恚奈ことには頓着せないで随分甚いことをやるので丁度大地主で裁判官を勤めてたサ、トーマス、ルーシーといふ人は苦をしい事に思つてたけれど何地でも八ヶ間敷く咎立てると却つて面白半分にもない悪戯を反抗的に行ると同じくルーシーの肝僻は若衆の反抗心を呼んだのだらう折角造つた柵を越へてチャールロットのサー、トーマス、ルーシーの獵獸苑は特によく荒らしはじめた。ウキリアムもルーシーのチャールルの獵獸苑から家畜を盗むことが度重なつたので告訴せられ罰せられた。未だ道徳上の制裁寛なる時の若氣の過失で爲たことだ

からウキリアムは其の刑の酷なるを思ふて之が復讐的無念晴をせよとて譏詩一篇を作つてルーシーを嘲弄した。之が爲めに更にルーシーの忿怒に觸れ遂に居堪らなくなつて英京に走つたらしい。ニコラス、ローヤやグルースターシアの某僧の記録には盜鹿の一件からストラッドフォードを出奔したとしてあるが。オペレーの所謂資性既に演劇詩歌に傾いてたのも出奔の動機の一つであつたらうと思はれる兎に角にウキリアムは若い衆の野次連の中から特に地方の有力者ルーシーの鋭い眼に睨まれて故郷ながらも住心地あしくなつた。と共に華やかな近代の曙光輝く都の空の一層なつかしくなり。面白くもあらぬ今日此の頃の家庭の暗さにも飽いてる矢先とて儘よとばかり飛出して倫敦へ出たものらしい。

第七 漂零の遊子 (ロンドン行)

若い者の夢は美しい。青年の希望は華やかだ。輝く頬には暢びりとした生々しい紅の血が漲つてゐる。燃ゆる眸には麗はしい花の世界が映つてゐる。憂き世の荒い浪風の味は嘗めたことがないから旅は嬉しい面白いものとのみ思はれてゐる。頓て辛い潮風に揉まれて懇めた眉の間に皺の數殖ゆる頃は晴々とした眸はドンヨリと曇つて世界は何だか暗く見え。華やかな希望は褪せて頬に涙の痕が刻まれる寂寥しい夕を迎へる迄、面白の世を夢心地の氣隨氣儘。心のまゝに西東、行き暮れて宿る木下陰。花を主人の風流は歌ならぬ實世間に見んものと春より知らぬ胡蝶の浮かれ心の春氣なものである。寒き日を春と詐しても花は咲かぬ。胡蝶は秋迄生きて居れぬ。青春

の胸には紅い血が湧いてゐる。面白くない處には一刻の辛抱が出来ない。七面倒な係累は脱してほしい。暗い寂しい地味な暮しは堪へられないほど辛い。ストラッドフォードの田舎町では既に一角の若い衆になり澄ました。ウキリアムだ。意地も面目も氣になる。恥や外聞も考へる出来心の悪戯で世間並な行爲でもルーシーの仕方が癪にさはる。拳を握つて腕節叩いて見てからが大きい物には巻かれよのたとへルーシーは。大地主で裁判官である。自分は貧乏な青二才の分際。意執晴しすれば再度酬は靦面にくる。涙もあれば情もあれど残念無念が先きたつと何の太陽さまは此處のみに照らぬとなる。親もいとしい妻も氣遣ひな。肉親の兒も思はぬでないが。話にきいた都大路の賑やかさが扱て何となくなつかしい。花魁はしい人もあろう。舞殿めしの人も居らう。華やかな都の住居は夢面白いことだらう

男六尺何の……何の……と心の底に呷くものがあつては凝として居れないことには。常日頃から旅稼ぎの田舎芝居も見えてゐる。役者にも心易くしてゐる。自分の趣味は其の方に傾いて儂ない望みも抱かぬでない。それも本場は都大路だ。何をすることも田舎では飽氣ない都といつても百哩近くだ、急激な時代轉化の京の嵐が吹いて來るとアポンの小波に浪騒いだらう。東南の空廻かに瞬く星の光も今更らに仇ならず考へられて漂然と家を出で美しの故山の野徑を踏み分けてたい譯もなくロンドンへと急いだらう。

千五百八十六―七年の頃は最早や土臭い田舎には居らなかつた。ア―デンの森もアポンの河も廣い野原も奇麗な花も、面白そうな小鳥の聲も、傳伴の父母も、年増の妻も、花の如な兒も、暗い寂しい家も若きツキリアムが一徹の心を翻すことは出来なかつたがそれが爲

めに立身の端緒を得て一介、漂零の遊子は詩神の寵兒として天晴大英國の誇りとなり。人類の誇りと迄紀念せらるゝようになった。

第八 螻 龍 (馬番となる)

青年の希望は華やかだといつて見てもたいそれ丈では生きて居れない、いくら空想の翅を擴げて見ても飯を食はねば腹が空く一日二日の辛抱なら瘦我慢からでも爲してみようが仙人でない俗物が眞逆に腹を喰ふても居られない、都大路は賑やかだ。綺羅を飾つた人は多いが他人の飢渴を探ねて歩く程呑氣で親切な者は居らぬ。豪奢の巷に呆然と佇むで車馬絡驛たる忙がしい様を眺めて居たからとて好きな仕事を見付け出して來て呉れる者もなければ一片のパンも口へは入らぬ。サ、ラ、バといつて西東馳け歩いて仕事を探ぬるとなつても

思はしい口は滅多と見付からぬ。理想は高うても希望は立派でも腕に覚えの一つや二つ藝があつても勘定高い世に値踏みなしには賣つこがない。高くとまつて氣取つて見ても背に腹は代へられぬ。我慢も意地も棄てなければ目が暈だす頭が鳴りだす。日頃自慢の足元がフラ付いてきて腹の蟲奴が承知しない。腹の蟲を納得さすには頭が不平で反對を唱へる。兎角若い者には何時の時代にも就職難の怨みはある。

二十一、二歳のウキリアムも来て見れば都の住心地も案外悲いと思つたろう。今更らの様華やかな夢も醒めたるうといつて、彼には意地もある恥もある、此のまゝどうして故郷へ歸れよう。死ぬには餘りに命が惜しい、乞食する程大膽でない。一角の村の若い衆も熱々と思案の涙に暮れたろうが。思ひ直して氣を取り直すと狭いと見え

た浮世は思つたより廣い。勝手の悪い世の中も調法になつて来る何も辛抱少と諦めると賤しい勤も面白く出来る。慙うしてウキリアムは馬番に雇はれるようになった。アムは馬番に雇はれるようになった。近うても吾が土地離れりや他郷の空だ。花の都は廣いけれどもウキリアムには知人がない。前途定めず飛出して来た山出しの田舎者がどうして思はしい仕事にありつけよう、来る途中では慙うもせようあゝして呉れようと考へたろうが。来て見れば案に相異の誰の面にも險がある。何程芝居が好きだからとて、オオそれと樂屋は覗かせないもとより舞臺が踏めよう筈もない。パンの爲めに職を漁つた彼は嗜好の爲めに劇場で賤しい役廻りに甘んじて使はれるようになった。

當時の観客が馬で見物に来る。其の馬を預つて番をしてゐたとは世

間に傳ふる處である。或はコール、ボーイを勤めてたともいつてゐるが何れにしても碌でもない仕事を甘んじて勤めたらしい。人生の事多く志を違ひ易い。美しい自然の中で平和な田舎育ちのウキリアムの希望は意の如くならなかつたが。早くから家庭の暗い空気に包まれて油汗客まさ稼がねばならない境遇に育つた彼は同じく儂ない空想に憧れの迷ひ兒ではあるが眞摯なる努力を厭はないだけの素朴は田舎者氣質が残つてた。都の冷たい風に肩をツボめた彼は地味な本性に立ち返つて眞面目に働かねばならぬと思つた時はドンナ卑しい賤しい仕事にも甘んずる丈の餘裕があつた。

陳腐は言草だが風雲を得ねば狡龍も池中に盤して鮎や鰯のお仲間入をせねばならぬ。矢矧橋畔の鼻垂小僧は如何に忍耐と屈辱との試練を多く経験したろう、アイヌレーベンの一鐵夫の兒は幾何の苦難を

嘗めてツオームエの大会議に群る悪魔を戦かすの大絶叫をなすに至つたのだらうか。人生の救主は必ず生れながらにして王冠を戴ける者だと考へて永遠に只管神子の降臨を揆指して待ち憧れてゐる猶太人は遂に神の選にもれなければならなかつたではないか。

再度言ふ。神は常に其の最も愛する兒を幾度か試練し給ふのである。神は今や其の寵兒を最も幸福せんが爲めに斯くして彼れウキリアムを至愛の御手に試練し給ひつゝある。

第九 希望の曙光 (志業緒に就く)

當時のウキリアムは一介の田舎青年であつた。否寧ろ村の若い衆たるに過ぎなかつた。學問とてもない藝といつてはあろう筈もない。世の中に經驗とてもない地味な田舎者であつた。旅稼ぎの馬の足が

演る田舎芝居に騒いでる位だもの何程嗜好が劇に傾いたとて。本場へ出ては真逆に今迄の通を振舞はず譯にもゆかぬ。何でも都は賑で好い所位の考が胸を煽つて譯もなく戀しいなつかしい。出掛けて来れば直ぐにも面白いことがあると思つた的が違つて仕方なく賤しい仕事に暫時の苦勞を偲ぶことになつた。と仲々に今更の淺墓な了見が吾れながら恐にも情なくなつてくる。世路の險難なことを痛切に感ずる其處で敗け嫌ひの意地が出て来る。オ、ハ、と涙を呑むで得意の都人を睨むだ時に彼の胸中には華やかな希望の光耀が一時に映して蠢爾たる凡俗の徒輩は最う眼中にはなかつたろう。

故郷を出る時には一角の見識も持つて来た積だ。何の都大路まで遙々と世間の者から爪弾きされる賤役を敢てせようが爲めには出ては来ぬけれども事情既に斯の通りで却つて自己の愚蒙と淺慮とを悔い

ねばならぬ破目になつて見れば恥も棄てる外聞も顧みて居れない。で餘儀なく節を屈しては居るも、さりとして憊うなれば歸らぬ愚痴を繰り返して無駄に月日を暮らしては居れない。志業一度蹉跎したからとて自棄するほどの迂は真似られない。靜かに顧みて深く考へた彼は眞面目に與へられたる務を全ふするに缺くる所はなかつた。天性の機才を弄して早くも一身の信用を贏ち得たのであつた。

セークスピアは憊うして一方に世間の信用を買ふと共に一步一歩其の目的に向つて近付くことに努めたのであつた不格構なる風姿素朴なる其の土音、見るからに時代遅れの土百姓とフキ出したくなる木強漢たりしウキリアムは道れ粹に育つた都の才子をアツと云はせる程融通が利く。何を爲せても抜目がない。それが段々と認められて来ると鼻で嗤つた人達迄が鑑定違ひに氣を取り直して打つて獲つ

て交際するようになる。そうしてゐる間には引き立て、呉れる者が出てくる。地位も上る。詩才も認められる。技倆も試す機会を得るに至つては既う占めたもの奇麗な観察と非凡の鬼才は日一日と發現して頓ては相當の地位に迄上げられることになつた。

一介の田舎若い衆は慙うして少くとも初めの志望は達せられたるうが而し西洋の俚諺にある通り天才計りでは磨かぬ壁も同様、燦爛たる輝きも發するに由がない。僅かなる教育を受けたる一青年がよ

く後代に迄頌はるゝ作をなす丈の腕を有するような善はない。

セークスピアは實に其の賤役時代に於て一面多大の修養を積むたのであつた。彼の見聞は頓に廣くなつた開放されたる當代の學術に接觸するの機會は多く得た。多くの學者の説は聴くことが出来た。二十幾年井底の痴蛙は茲に大海に出ることが出来た。秀絶せる天才

は。發路して觸るゝ萬事は自己智囊中のものとして終はねば止まな

いストラッドフォードから掘り出した玉は慙うして磨かれた。彼が他日の大傑作の基礎は此の時に於て作り上げられたものであつた。

多くの經驗と智識は何日の間にやら彼の頭に靜かに置かれてあつた

今や彼は乗すべきの風雲に會した。馬番、ポール、ポニー、ブロムタ

ーと何時の間にやら藥屋へ遣入り込ひだ遂に脚本の編纂改作に従事する迄になつた。

第一〇 先輩の嫉妬 (グリーン等の嘲罵)

神は天才を草深き片田舎に暗から闇へ擧り去らんが爲めには生み給はぬ。ストラッドフォードに朽ちるに惜しきウキリアムは今や花の都のロンドンに於て鬼才漸く其の光銜を顯はして鈍き當代の凡俗が

眼を驚かすに至つた。
 穢れたる不体裁なる着物を纏ふて哀れなる憶れの夢に迷ふて来た當
 時の田舎風は抜けて觀客の馬番として愛嬌を惜まず其の職に忠實に
 注意して勤め終うせて後のセーキスピアは時代思潮に洗練し上げ
 た輝く希望の満ち充ちた立派な紳士であつた。感溺の悪魔が放つ七
 彩の光輝に眩暈して驚倒する者は世間にあるかも知れないが。詩神
 の琢磨せられたる天才の光鋸一閃。世界を彩映した時、眼を閉ぢて
 恩寵に背向くべき不信の兒はなからう。沙翁が非凡の技倆は何日迄
 其のまゝに柵の下に覆はれてゐるべきでない。頓て世間は秀絶せる
 才氣に驚いて非常の注意を拂ふに至つた。公衆は彼の作を歓迎して
 市井に評判高く彼を謳歌する者少なからずなつた。人氣は漸く新進
 の少壯詩人に集まるようになつた。

而し世間には豐譽を唯一の生命と頼む徒輩が多い。彼等は輕薄なる
 才力を弄して衆愚の眼識を瞞着し。唯一時の勝利を誇る、媚俗の佻
 文士と飄飄なる木葉詩人は斯くて街巷に跳梁する。坊間の聲譽は偏
 に彼等が價値を評定する標準として童叟の一語善く其の杞憂を分つ
 ことが出来る。市井の輕薄兒が圖らざる好評を買ひ得るや彼等は得
 意の鼻柱高く淺薄なる其の辭想と筆華を誇つて得々としてゐる。世
 評若し意に任せず、知己たゞ一人を得るに由なきの時彼等の自信は
 動搖して意氣頓に衰へ。暗慾深く其の面を被ふて快々として現世の
 哀衷を嘆つ。彼等の眼には敬虔なる藝術的良心の輝きなくして卑賤
 の婦女子と同様に指彈すべき嫉妬の焰が怖ろしく燃えてゐる。斯の
 如き徒輩の跳梁する時代は即ち藝術の墮落してゐる。社會の衆愚は
 徒らに妖艶を衒ふ彼等の鎧華に感染れて一顰一笑毎に彼等の鼻息を

覗つてゐる。社會既に然り。作者亦然り。文華煥發せりと謳歌する
 時代に崇高なる信念に精鍊されたる一篇真に人生の奥諦に觸れたる
 作なきあるも故ある哉なのである。而しながら無縁の卒塔婆野に殖
 えて混沍たる魔風世界を包被する時に至上の神が人の子を遣はして
 覺醒の喇叭を吹かしめ給へば妖雲拂はれて光耀燦として下界を照ら
 し。跳梁する大魔小魔は忽ちにして逃げ惑ふ。其處には踐しき叫喚
 の聲をきくことが出来る。哀れなる斷末魔の呼號を明けなんとする
 世界の朝晨を呪ふて喧嘩を極める、けれども悠々として登る旭日は
 東俗の曉雲を破つて金色の曙光は地の涯までも赫灼として投げられ
 る。道がに頑なる凡愚の夢は此の時に初めて醒まされ、世界は拜跪
 して麗はしき空を讚美する。至善の神が裁断は公正にして荆棘何時
 までか野に蔓延してゐることが出来よう。其の時に至つて力ある評

家は天才の偉大を認めて眞價ある作物を王坐に供へる。藝壇の春は
 斯くて來復するのであつた。
 此の譬は何時の世にも洩れない。沙翁の出世譚の一頁を矢張り斯の
 如き小才子の奸妬手段に操られんとした暗い筆の惨みを認めねばな
 らない。前にもいつた通り開放されたるエリザ朝の藝壇には夙くよ
 り跳梁する才人が多くあつた。所謂大學才子連を初めとして随分と
 花も實もある作者も現はれた。が藝術の花圃には詩神が美妙の天樂
 怡暢として不斷の歡樂を調に載せて面白く人間の血を煽動する。多恨
 の人は現實の強き地の香に酔ふて不識の間に浮かれ胡蝶の夢心地に
 なつて騒いでる。淋漓たる醉筆に奔放なる彼等の思想は染められて
 自由の王國には衆愚の眼を盗むで潜越なる地位と榮譽を擅にせる者
 も妙くなかつた。卑賤なる自己の評價を維持せんが爲めに哀むべき

聲に後進を呪ふ者が多くあつた。彼等の多くは藝園の春に浮かれて現實の甘き味に身も魂も腐らしつゝあつた。強き香の酒は腐蝕しつゝある靈魂を刺激して僅に筆華の衰褪をせき止めてた。が身は益々放縱に持ち崩して零落の黒き影は遠慮なく押し寄せて來て彼等の凡てを包み去ろうとする。葬られじと蕩擻く其の身は歩一步黒闇の淵へ導かれる。涙の聲を絞つて救ひを乞めた時、社會は面を背向けてさし昇る新らしき曙光に讃歌を捧げてゐる。曲める彼等の口からは忌むべき呪の節をさくのであつた。

當時ロンドンにあつた演劇の座敷は大人六座小兒三座であつた。其の中で沙翁の加はつてゐたのは有名なる「ゼ、ロード、チエムパレス、サーバンツ」の一座であつた座主は他日彼の會心の友として親交舊ならざりしリチャード、パーベードの父チエームス、パーベ

ードであつた。

ロンドン市應は其の頃大層な反對運動をやり。有志は私に眉を擧めて風教の惡感化を氣遣ふ者もあつたけれども溜々たる時流のゆく所また如何とも詮方なく。劇場は盛んに新築せられて其處此處に市井の人氣を呼ぶのであつたと一面また議會は條令を發して浮浪俳優の續出を防いだが當時の貴族は進むで最負々々の保護をしたものであつた。

如何に超越せる奇才があつても沙翁も貴族の擁護を仰がすには居れない。チエットルの書によれば彼が上流社會に其の保護者を得つゝあつたのは嘘である。非凡の鬼才と貴族の擁護とによつて當代の公衆が渴仰の中心とならうとしかけた。沙翁を見て多くの作者達は黙しては居らない。一方に於て彼が好評を博すれば他方面に於て賤し

き嫉妬の聲をきく。非常なる歡迎者あれば極力排斥に努むる徒輩が出る。而しながら區々たる世評は敢て彼の顧みる所ではなかつた。偉大なる沙翁の耳には小人輩の輕薄なる譏譽は蚊のなく程にもきかれなかつたらしい。雄なる彼の人格は微少なる評判に動かされよう筈はない。簇出する世評に關せず彼は一意向上の一路を急いだ。言はず、語らず、堅く緘黙を守りて私かに凡愚の痴態を冷笑し去りたる沙翁の襟度の寛宏なるに驚いた有識の士は心から嘆美讃稱の聲を絞るのであつた。斯うして得たる彼の嘆美者は決して一時的の者でなかつた。煥發せる筆華の光彩に迷はされ。辭想の陸離たる麗姿に惑はされ。感情の行くがまゝに聲高く謳歌して頓ては悠々行路の人として曩日の嘆稱何地へやら。自己が鑑識の輕操なりしを悔いすして却つて常人の力なき作物を惡罵し去りて得々たる無識の評家では

なかつた或者は一代の知己として。或は眞の崇拜者として彼は多くの所謂信仰の中心となつた。心からなる之等の阿流が嘆稱と崇拜の聲は怡盪なる讚美の歌と化して彼の身邊を圍繞したか。彼は未だ會心の微笑を洩らすに至らない。彼の他日の作が後代の嘆美者として無限の情趣汲めども盡きざる不測の奇跡に驚愕せしめつゝある如く彼は造化の妙趣探れども神秘の帷幕奥深ふして秘鍵を奪ふて覆載を闡明するに由なきに驚嘆して。只管に渴慕せる光明の一路を自然の曠野に索めて急ぐのであつた。

斯うして彼は精力の凡てを舉げて不斷の努力を惜まない。往き行く彼が精緻敏活なる眼に觸れ耳に響く萬象は彼の辭想によつて飾られ其の斧鑿によつて永遠に世界に刻銘せられることになつた。一度彼の聲を聴き彼の鑿痕を覗へる者は雄渾なる其の辭想と精緻なる慧眼

とに驚くと共に五十有三年の生涯、善く此の大業をなさんが爲めには區々たる。人事の穢絆に戀着するなく只管に光明の一路を急いだ所以を知ることが出来る。天の呷き、地の咽び、聴けども汲めども果てしなき宇宙の秘機を捕へんとせし詩人の心は忙しかつたことだろう。

第一一 遊蕩の才人輩 (當時の作者)

志を劇壇に嚆し、刻苦漸くにして。劇場に入つた沙翁は千五百八十八年(?)にタイアス、アンドロニカスを出した、次でヘンリー六世第一篇を出した(千五百九十年……九二年?)。之等は何れも沙翁の改作修正したものである。それからラプス、レーポアス、ロストをば千五百九十年に(千五百九十七年修正)を出し、千五百九十

年にカメダイ、オブ、エロアスを出した。此の内前者は全く沙翁の創造によつて編み出したものだろうとのことだが後者の筋は奮劇、ぜ、ヒストリー、オブ、エロアに據つたものらしい(沙翁の作物に付ては後に纏めて凡て紹介する)。前にもいつた通り彼が斯うして段々と作物を出すにつれて當今の藝壇は吾等の舞臺で御座ると意張つてた先生方が眼に角たて、注目するようになる。沙翁は吾れ關せず焉と澄ましたもので其様手合が筆に痛罵を初めても蚊の鳴く程にも氣にせないで一意専念自己の使命に向つて奮進する、と其の憎くい程おち着いた態度に魂まで打ち込ひでかゝる嘆美者が出て人氣は愈々よくなる。血迷つた徒輩は鬨氣になつて口八釜敷嘲罵と呪咀を續けるようになった。彼の先輩であるロバート、グリーンが其の著エ、グローツウオース、オブ、ウ

イツト、ボウト、ツイズ、エ、ミリオオン、オブ、レベントゥスに於て口穢なく罵倒してあることは世間の者のよく知つてゐることであるけれども社會は道に公平であつて嫉妬と怨恨の聲に陰に微笑ものよりは寧ろ其の俗悪なる徒の心事を疑ふ者が多くあつた。然らば其の當時の作者はといつたなら沙翁の先輩たるマロー、グリーンを初めとしてビール、ナツシユ、ロツジ、チエツトル、マNDER、ウキルンなどであつたが何れも當代の作者氣質に感染れて随分と放縱な生活を續けたものであつた。時代が既に現世の歡樂に酔ふてゐる所へ夢見心地の浮かれ男が自由の世界へ相當の地位を勝ち得たのだから堪らない。酒池肉林に生慾の向くが儘に奔放な生涯を送る者皆然りであつた。金を握れば酒を飲む。痛飲暴食の次は紅燈影小暗き處に怪性の女性と戯れる。蘭房の喃語に飽ける者は綠酒を酌ひて豪語

放言する。酔ふては管まき飲むでは騒ぎ。それはもう言語に絶した不規則な無謀な其の日を送つて遺憾なく生慾主義を實踐してのける淺墓な現世主義に耽溺して他愛もなく太平樂を並べる。マロー既に然り、グリーン亦然り。何れ劣らぬ耽溺の最後は實に慘なるものであつた第一流の作家にして此の通りだもの以下は推するに及ばない時にマローの如きグリーンの如き適れの技倆を身に備へながら酒色に沈溺して哀れなる最後を時人に唄はるゝに至つたなどは惜しむべき限りである。斯うして良心の魔痺して終つた彼等の言葉はきくに耐へない。其の汚れたる心根の卑しさを思ふと或は慢罵は彼等の上にはさしたる大事でも何でもなかつたかもしれない。其等の間に介在して屹として凡愚を睥睨する沙翁の態度は短氣で我儘な彼等の癢に觸る点だつたらう。たとへ相携へて其の頃名士の集合する所で

あつた有名なマーメイド樓上に近く輸入された煙草を燻らしながら面白い話に耽つたにしても。或は美酒を酌み交はして浮世話に耽興涌いて盡きないことがあつたにしても金を残した沙翁と零落の暗き闇から闇へ死んで逝きし他の作家と相容れなかつたのは尤であるが正は遂に悪に勝つ。邪は逆でも滅びずしては止まない。グリーンの嘲罵はチエツトルによつて辯解し謝罪するあるまでになつた。一は零落の最後を唄はれ。他は努力の勝利を讃美せられた。哀れなる蟲は寒い風に凍冷て死に。麗はしい紅葉は霜に逢ふて愈々美しく染まつた。

第一二 苦闘の産物 (初期の作物)

現世の甘き味に囚はれたる當時の作者氣質を遺憾なく發揮したのは

敵にもいつた通りマローやグリーン一派の者である。放逸なる生活に感染れて闊い零落の淵に沈むで行く多くの此等の作者の中に濁りに染まぬ花逆華の崇高い香に識者の稱讃を買ふた沙翁はそれだけの努力をした。

通れの才力を有しながら儂ない最後を安宿の片隅に急いだマローや憤満の耐へ難きに悶へて酸鼻の終焉を卑賤の人の家に遂げたグリーンなどの哀れなる末路は何れも後代多恨の人が同情する處だが其等の間に儼として秋菊の態ある沙翁の勝利の價値は讃美せずに居れない。沙翁は今や素晴らしい勢で進むだ。

彼は千五百九十二年―九十三年にツ、セントルメン、オブ、ヴェロナを出し、千五百九十三年―九十四年にミッドサムマー、ナイトドリームを出した。千五百九十一年（或は千五百九十六年―九十七

年との説あり)には熱情燃ゆるが如き南歐の戀物語ロメオ、エンド
 ジュリエットを出してゐる、彼は舞臺に俳優としてオーブリーの所
 謂極めて巧なる手腕を弄し作者としては精力を擧げて努めた。沙翁
 は區々たる名聲に直ちに功なれりとして安逸を食ふなどのことはせ
 なかつた。治まれる御代太平の當代の變り逝く思潮の夙くも彼の陰
 に注意して怠らなかつた所であつた。兵力に於て外交に於て戦勝の
 國民が思想の往く所は作者の筆を按じて覗ふ所であつた。國民は擧
 げて祖國の隆昌に歡喜する。時代は歴史の價値を認めて來て愛國の
 熱情は日に燃えて來る。世間は集つて祖先の逸話に興を探ねて誰も
 彼も自分の血を傳ふて鳴る腕の因を誇らうと焦る。そうして僅なる
 傳説にも古き人は蘇生つてくるセークスピアも、歴史研究に憂き身
 を獲したものだ。

内に勢力の充ちてきて外に祖國の稜威を誇る國民の口からは常に吾
 人の祖先は……といふ言葉がきかれる。而して彼等の眼は其の國
 の古き歴史を辿る。其處には些細なる傳説も、逸話の断片も多大の
 興趣を以て研究の資材となる、機敏なる作者は速に之等市民の感興
 の往く所を洞察して其の筆其の想は隠れたる事蹟を美しく飾らんが
 爲め細工に腐心せられる時代思潮の流れに棹して進むで社會の歡心
 を買はんが爲めに俱に努力するようになる。セークスピアも斯う
 して祖國のなつかしい想に血を湧かした。彼がヘンリー六世の二篇
 は斯くして出來上つた。リチャード三世も其の間に稿成つたものだ
 が多感多恨の此の詩人は未だ全くアポンの河畔なつかしき。嬉しか
 りし戀の夢を忘れ兼ねてゐる。志業緒に着いて來ると共に昔の儂か
 りし夢の跡を幻の影となつかしむ。そこで詩人は歴はしい南歐の多

く、戀物語を漁り讀むで僅に此の哀怨を忘れたに違ひない。青葉若葉に涼風戦ぐ南歐の盛夏にかけて弱冠の年少が呪はれたる命運の拙なき戀の悲劇ロメオ、エンド、ジュエツトは詩人が其の若々しい血を最も速く浪打した作だつたにちがいない。

其の内に國民が歡樂の夢は神が警醒の鞭撻に遇ふた。千五百九十二年の秋から翌年の夏へかけて奔逸せる國民の熱狂を冷すべき天の裁断は下された。怖ろしい疫病は至る處に蔓延して迎ても手に負えない、今日は何地に、明日は此處に英國民が薙れやかなりし面は愁の雲かゝつて市民は蒼くなつて其の猛烈なる傳播に戰慄した。如何に時代に感染れても生命は常に大切である、今更らに斯くても歡樂の沙汰ぢやない。が何時の世にも馬鹿と呑氣坊は澤山ある、吾れと生命は惜しくても身を慎むことの出来ない者がある。人寄せを生業と

するものは斯様時でも兎や角の理屈を付けて人を誘ふ。怖るべき神の警告に慄え戦ぐ國民の心は暗く滅入ろうとする。思案は無用、心配は五体に帯。サア、御座れの興業人は遠慮斟酌して見合はしそうにもない。何の一度は死ぬべき生命。定命五十年相場は神代の昔から掛引なしの正直正味苦世々々して氣を腐らしてゐてからが幾何の徳があるう飲んで食ふて浮かれて騒いで面白く暮らしたからとて病に罹ると定つた譯でもなし。そんじよそこらに不幸者があつたればとて吾れ迄折角の面白味を殺ぐには當るまいと悟つたような得手勝手な理屈を考へて劇場に集ふ命不知。逸樂に耽る浮かれ者は絶えない。其處で政府は命令を嚴達して苟にも人寄せの娛樂嬉戯をば止めて終つた。何でも裁判所などの役所さへ閉ぢるに至つたといへば随分と烈しい流行だつたと想はれる。猖獗を極めて此の疫病の爲め

には宮中に於ける基督降誕祭の餘興さえ其年には見合せた程だつた世界は今や暗き影に包まれた。夢忘れ兼ねたる英國民の面には不安の影が浮動してゐる。花やかに飾つて晴やかな聲に歡樂を説いた。市民の口からは滅入るような哀れにも心細い愚痴が出る。弱き人間は造化の威嚇に青蒼い面して戦いてゐる。

第一三 戀の王國 (沙翁の戀物語)

全智の神が人類の輕薄に震怒し給ふて下し給ふた威嚇の鐵槌は英國民をして強き戰慄と恐懼をなさしめた。誇りかなる其の顔面は不安の暗き影に包まれて憶がれの眼は曇つて小さなる低き吐息は襲ひ來る妖魔の手に捕はれじと注意するかの如く、忍びやかである。極端から極端に落ちた國內の空氣は重くるしく沈むで世界は頓て末の日の

擾亂來るかど氣遣はれる。

斯る一年を恩寵の兒沙翁は如何して送つたらう。詩神は其の選み給へる一人に如何の試練をなしたものだらうか而しながら世界は闇の夜の黑白も分すなつたまで沙翁の心に希望の光明は消えはせぬ。これは此の一年を依然使命の一路に急いだらうと思はれる。

アポンの河畔に戀を唄つた時は花やかなロンドンの賑やかさが譯もなく戀しくて耐らなかつた一介の田舎青年もロンドンに出てからは昔の憶れの人の仲間を離れて努力の大を致すに餘念なかつた。が其の間にも多くの情の兒、詩の國の住民が南歐伊太利の花やかさに胸を騒がせてゐるのを見聞して彼も亦意をゴロナやエニスの榮えに馳せて文藝復興期の伊太利は憶れの種であつた。地中海の軟かい風戀しの想に胸を燃して詩人は此の無聊の一年を伊國に送つたらうとは

一部の説である、作に現はれた伊太利ツ、ゼントルメン、オブ、
 ヴエロナ。や。ロメオ、エンド、ヂユリエット。や。マーチャント
 オブ、ヴエニス。や。テーミング、オブ、ゼ、シユルー。や。オセ
 ロなどに現はれた伊太利……を精細に研究して詩人が伊國の風物
 に日頃の渴せる詩藝を溶ほしたといふてをる。が果して沙翁は沈み
 切つた一年を華やかな。伊國に送つて来たかどうかは疑問である。
 其の内には國民の愁眉は開られる、陰雲何時の間にか霽れて英國
 の天地には再び生氣漲つてくる。沙翁の作は續いて出た。かゝる間
 に出たのがリチャード三世である。第九十四年にリチャード二世が
 出た、次でジョン王を出した。其の間にはまたマーチャント、オブ
 ヴエニスをだし、ヘンリー四世、ヘンリー五世と相踵いで出た。
 それから九十八、九年頃からメリー、ワイズス、オブ、ウインズル

とか。マツテ、アヅ、アバウト、ナツシング。とか、アズ、ニー
 ライク、イット、とか。ツウエルフス、ナイトなどの喜劇が出た。
 彼は憊うして喜劇史劇を續出した。
 斯かる間に詩人は依然貴族の厚き保護をうけてゐた。レセスター伯
 や、ダービー伯やチャンパレーン卿やサウサムプトン伯やヂエーム
 ス王などの保護によつて彼の生涯は益々自由の活動が出来得た丁度
 千五百九十三年頃は弱冠のツウサムプトン伯の擁護を享けてゐたが
 其の恩誼の厚きに感激して情詩ヅキナス、エンド、アドニスを作つ
 て同伯に捧げた。翌年には彼が同郷人フキールドの手によつてリュ
 クリースの詩を出版し年餘を出でないのに直に數版を重ねたセーク
 スピアが詩人としての名聲は頓に揚る、と其の頃になつて地球座
 の新築落成して沙翁は主要なる出資者となつて幾多の劇曲を作つて

登場せしめた。そこで此の詩星の光芒は愈々現はれて来るようになった。斯くして歩一歩、日一日と成功しつつある間に沙翁には美しい戀物語があつた。床しき物語の女主人公は果して何といふ名であつたかは今に至るも明でないが優しき詩人の胸に言ひ知れぬ温かさを覚えしめたのは争はれぬ。セークスピアが喜劇と史劇とに筆を染める閑で鴛鴦を走らして其のなつかしい人に奉獻した當時の短詩は吾等が彼の甘き戀物語を窺ふ唯一の手段である。故郷には妻もある、子もある、けれども都の風に新らしき空気を吸ふた彼には美しかりし妻の姿も野草に見える、泥臭い。八ツ年上の女の色は速く褪めて古女房の澄ました面は若い詩人の心には氣拙づく耐らない。都には美しい女がある、機智に富むた快活な、粹に

捌けた女がある、其の言葉は流暢である、其の智識は敏捷である、濃な其の情は若い詩人の心を躍らせる。彼がポーシアの様な女を戀してゐたことを思へば後年彼が其の妻に對するの態度も慥ばれる、何れは都人の美しき、詩人は熱き唇に心ゆく迄若い女の白き額に接吻したことだらう。詩人はダブルユー、エツチなる人に美しき詩を奉獻してゐる。其の如何なる人であつたかは知る由がないが、短詩の中に現はれた情熱から考へて見ると仲々に仇ならぬ語らいをしたらしく思はれる。而しながら何時までも戀の王國に坐するの人は稀である。額に皺の敷が殖えて来れば速く循つた血もいつか落ちついて来る。心臓の鼓動の静かになつて来て華やかな空想の世界に遠ざかるに随て青春の夢は醒めて来る。飛鳥川淵瀬と變るに速い世の中の態が瞭

に心象に映る。昨日迄の淺淺さが情なく思はれるようになった時に
 中年の悲哀が泌みくくと感ぜられる。斯うして初めて落ちついた思
 索が出来るようになる。人生の眞の味も分つて来る。ともう今迄の
 ような浮薄な憧の念はなくなる。詩人は何時までも若いといつても
 それは戀に若いのでない。希望に若いのでない。精力が常に生々ど
 してゐて不斷の努力があるのだ、詩人の眼に映る自然の姿が無始無
 終に若いのだ。凡俗の眼に映る自然は其の人の年と共に老いて逝く
 けれども詩人の心象に映じた自然の姿は昔ながらに若い。華やかな
 点がある。如何に大精力の天才でも戀には褪めて来る。希望には疲
 れて来る。心の底にはジリ、ジリと人生哀怨の泉が油汗のように滲
 出る。色もない。味もない。がその心の油汗に練つた情の琴線に事
 毎に微妙な節調をなして挽歌を奏する。それが筆に染められて力あ

る悲曲となる。
 白面の田舎青年が面には今や平和の相が現はれた。廣い額には大悲
 の神の相が映つてゐる。思索家の多くにみることの出来る古のギリ
 シヤの哲人などのやうに其の面の温厚平和の中に首ひ知れぬ悲痛の
 暗示を見せてたろうと思はれる。
 喜劇と史劇を多く出した沙翁が心機の轉化は其の作の上に如何なる
 影響をしたか。神は選み給ひし其の寵兒をして使命を全ふせしめん
 爲めに猶ほも試鍊を續け給ふた。百鍊千鍊神が心を込めて造り磨き
 上げ給ふ彼れの心鏡には造化は如奈の姿を映し給はんとする。攝理や
 穢れたる凡愚の覗ひ知ること出来ぬ。

第一四 有爲轉變の世 (恩人の悲惨なる末路)

志緒に着いて以来の沙翁は當時の作者仲間の放縱なる習俗に染まることなくして最も眞面目であつた。名も段々知られて来る。作物も多少は出した。作者として俳優として相當に金も儲かるようになった。てからは金を蓄めた。零落の一家を思ふては身も世もあられす情ない、家山の美しき風物を偲ぶにつけても暗い一家の哀れなる態が眼々目に浮ぶ。都人の派手な暮れを見るに涙がこぼれる、ともう無駄な費は節約して儉ない月日を送つて座る父母を光明の世界へ導き出さねばならぬといふ氣になる。がそれも初めのうちは氣ばかり焦々としてどうする譯にもゆかぬ。家郷との音信も兎角は絶え勝ちになる苦世々々してゐても仕方がないと氣付くと今度は專念出世の手

段を講ずる。眞摯なる努力をなして進む内には信用も出来てくるし地位も得るようになって来る。愈々身をしまつて働くので一層内外に利益を得るようになる。斯うして彼は光明に進むだ。と千五百九十六年には故郷に残して其の子ハムネットと其の叔父ヘンリーが死んだ。叔父と子が死んだ後も一層精出して働き努めて其の名は愈々高くなる。其の翌年には當時彼の故山ストラッドフォードでも最も壯麗であつたニユー、パレースなる家屋を六十磅出して購ふた。彼は金を貯へて段々と土地を買ふようになって来た。其の頃友人から金の貸借を逼つた手紙などによつて見れば餘程内福になつてきたらしい、けれども生計に多少の餘裕が出来たからして吾が業成れりと安心するには今の沙翁は餘りに大きい。彼はパンの憂のなくなるに共に愈々努力した。セークスピアの胸奥には始終ストラッ

ドフォードの父母の家が映つてゐる、零落の一家を再興するは大なる自己の責任であるかの感がある。痛切に斯く感知ては人一倍の努力をするようになる、沙翁の奔走の結果は千五百九十九年になつて倫敦紋章局からシエークスピア家へ家紋を呉れることになつた、紋章局から家紋を貰つたのは即ち零落の一家が紳士の列に入つたのである、今から考へれば何の些細たることに過ぎないとしか考へられない。が而し何れの國にも斯の如き例は多くあつてツマらなきことと後人の考ふることとも。其の當時の者にとつては非常の光榮であつたのだ、我邦などでも封建の昔名字帯刀を許されたことは家門の大榮譽と喜んだものだ。沙翁一家も大層悦んだに違ひない。拙なき命運に囚はれたる父デューンは一家の光榮と其の息子の立身に歡喜したろう、が長い間荒蕪たる人生の逆旅に惘憊してゐる父は其の後三

年を出でずして下界の係累を脱して天上の人となつた、叔父ヘンリーを失ひ、小子ハムレットを先立たし、今また父を暗き家庭より全く救ひ得ずして死なした沙翁の心緒は纏綿して解く由がない。哀莫の悲感に打たれて断腸の耐へ難き想に私に轉變の世の儂なさを觀じた彼の心機は茲に一轉せざるを得ない。而も神は大なる鐵槌を下し給ふて詩人が大なる覺醒を促し給ふた。丁度其の頃の事であつた。彼の保護者サッサンプトン伯及び伯の縁戚に悲劇は起つた。英國史を繙いてエリザ王朝の歴史を覗いた者は誰しも處女王エリザベスの嬖臣にエッセックス伯あることを知つてゐるだらう。伯は女王の寵遇を一身に集めて随分と我儘をやつたものだ。九朝の奥深く參して獨り女王の寵を擅にしたエッセックス伯には嫉妬の仇敵が多い

然しながらたゞ一朝にして女王が百年の契を絶ち切る譯にはゆかぬ隙を覗ふ妖魔は怠ることがない。蘭麻蕪る玉殿の奥深く女王が恩寵を身一つに奪つて巫山の夢濃かなる伯の身に仇せんことは仲々に大事である。徒に手を小拱いて機を熟するを待つ外はない然るに幾度か伯の幸運を呪ふて未だ志達せざりし反對黨をして遂に乘せしむるの時は來ずして止まなかつた。

千五百九十七年にチロン伯フーオネイル愛蘭士に於て叛亂を起したエッセックス伯は命を領して征途に上つたが戦利あらず、爾々の体にて英國に歸るの餘儀なきに至つた。廟堂の反對黨の者がどうして黙して敗軍の將を慰をうに。女王の愛憫は未だ舊に變らざるものあつても事茲に至つては如何とも仕方がない。華榮の夢は幻の如に果敢なく醒めてエッセックス伯はヨークの邸に幽閉の憂き目に逢つた

それより後は最早や如何とも策の施すべきものなくして伯は遂に反對黨が歡喜の鬨聲の中に斷頭臺上の露と消えた。其の縁類に繋るサウサンブント伯も囚はれてロンドン塔獄に圜圜の身となつた。

有為轉變の人の世はどうせ斯うしたものには違ひない。望花一朝の華榮醒めての後の無常阿邊一變の白骨を殘して愀々の怨は長きものであるが、歡樂の世界を包む命運の冷虐なる暗き手に牽かれ逝く人の生は多恨の詩人が温雅なる心裡に如何に強き怖ろしき響をなしたろうか。子に叔父に恨多き死別の涙干もあへぬ。今にしてまたも父を葬り、恩ある人を他所にして吾れ獨り娑婆の火宅に喘がねばならぬ切なさは詩人の霧やかなりし心を暗くせざるを得なかつた。現世の痛酷なる打撃に暗愁の耐へ難きに泣いた詩人は喜劇史劇の筆を焼いて新たに茲に悲劇の想を練ることになつた。

神は選み給へる一人の寵兒の爲めに大なる犠牲を辭し給はぬ。多くの人はたゞ一人の爲めに光榮の祭壇に犠牲として供へられた。

第一五 人生の咒咀 (悲劇創作)

頼むべからざるは人の身である。悪むべきは冷酷なる命運の弄手である、末の平、本の露よりも脆く消えて逝く人の命は儂なさの限りである、夢現何れは幻の華一時、空なる希望に身を委す人間の心根が浅間しくも思はれる、がそれよりもなほ浅間しくも情ないのは諍聞の巷である、事なきの日は蟲も殺さぬ音なしの面をしてゐる、醜はしい名に飾られた禮讓もある、情誼もある、世界は楽しい面白い處の觀があるまた世の中を多く知らない時分には其が言ひ知れず頼もしく思はれた。現世の怡樂は限りなきものと喜んで。三界火宅宿

るに心傷むべき娑婆とは悟れなかつたが美しい假面は剝がれた時、今迄の夢の世界は魔領であつた。眼に見えぬ人の心と心とは歡樂に酔ふて縋れ勝ちであつた跟々たる足下で早くから戦つてゐた、形相怖ろしく私に怨嗟の矛を交へてゐたのだ。それに氣付くと偽りの人が憎くて耐らない。今迄の淺蕙さが耻かしくも亦恨めしいと。魔はしく見えた人の面には悪鬼の相が見つる、優しく梳つた頭の髮の陰からは呪の角が生え出すように思はれる、厭だ。情ない、憎い、と恁奈に思ひかけると際限がない。はてしなく思ひ惱むでも世界は昔ながらに變らない。大自然は無窮にかたつて冷黙を守つてゐる。胸に汚惡を包める人間は雨に風に自然の威嚇を感じて戦くけれども自然は依然として冷かに緘黙を守つて何事をも語らない。歡樂の夢に迷ふては松吹く風も天樂ときこえた。窓打つ雨にも胸を躍らせた

非情の草木にも想を寄せた、たゞ譯もなく讚美もした、一朝罪禍の囚はれとなつては自然は冷かなる悲みに賦してゐる、地は無終の凝結に凡ての有情を凍結してゐる。世は冷寒の曠野に過ぎぬ、人は蠢爾たる呪の子に過ぎぬ。思むべきは現世である。呪はしきは人間である、花も前日の咲を見せぬ、月も愁の眉を開かぬ。眼を閉ぢると淺間しい人間の姿が映る。眼を刮くと社會の暗い恐ろしい嫌な處が映に見える。ともう華やかな世界は夢にもみることが出来ない。情の甘きは現にも味はふことが出来ない。泣くにも涙線涸れ果てた。曠がうにも紅血褪せて活氣がない。滅入るような淋しさから覺めた時には濫い笑が瘦せた頬に浮ぶ。蒼い光が窪んだ眼から映して世の萬象を射る。心一つの置場所に感ふた果ては荒涼の曠野に彷徨ふ身の心易さが思はれるようになる。胸へ惱む先きの日の眞面目さがなく

なると世を罵らすに居れない、卑しい人間を憫まずに居れなくなる心弱き徒は此の時に死の領へ急ぐ。精力の人は斯くて呪詛の聲高く魔領を開がすようになる。三人まで肉親の者を死なした。恩顧を受けた人の一家は悲劇の中に葬られた。と共に華やかに飾つた世界に恐ろしい浪濤たちさはぐのを見た沙翁の心は刻一刻岐路へ遁入つた。金殿の奥にも嵐は吹いてる。歡喜の世界にも毒牙。磨かれつゝある泰平の御世とは空なる秋の空模様。時雨來るまでの静さに過ぎぬ。頓ては揺落の悲曲に人の腸を断たう。荒寒の曠野に蛩韻夜もすがら世を呪ふて露華星に碎くるの朝は、落葉の墓に後の世を急ぐことだろふ観すれば恨めしの世界に消えを争ふ一時の心誇り。徳不徳、善不善、畢竟何するものぞやの氣にもなる、低き卑しき僅かなる智慧

を誇つて吾れと苦悶の淵に身を沈むる人間の愚かなる痴態が嫌に眼
 について耐らぬようになる。
 其の間には追がに榮華を極めたエリザベス女王も崩御遊ばしてジエ
 ームス嗣王の御代となつた。ジョンソンの讚詩やメリー、ウアイヅ
 ス、オブ、ウインヅルに關する傳説などに徴しても沙翁が女王の眷
 顧を享けてたのは明である。

ジエームス嗣王も劇保護をせられた。初めてロンドンに入るや直ちに
 ロード、チエムパーレーンの一座をキング、サーヴァンツと改稱
 して直接保護をせられたものだ。沙翁は此の座の主要者であつたの
 だから宮廷にても其の伎を演じたらうが。斯うしての間にも沙翁の
 心裡には暗闘絶えない先きに花やかに映つた世界の姿は今眼の邊に
 見る暗き世界の姿と正体を争ふて吾れこそは此の世の姿だと何れ劣

らぬはげしさである。そのうちには暗き影は益々勢力を得て來る明
 るい世界は呪の雲に被はれるようになる。と、そんなにしてる間に
 一方作者仲間ではベン、ジョンソンとデツカー、マーストン等との
 間に。葛藤が起つて共に口汚なく呪り合ふようなことがある。ジョ
 シン敗をとつて事は結末を告げても沙翁の心には濟まされぬ何も
 のかの嫌な想が残つたに違ひない。
 あれやこれや何れは神の試練だらうが、沙翁は此の間にあつて多く
 の悲劇を作つた

中期の悲劇

デユリアス、シーザー……………(一六〇一年)

ハムレット……………(一六〇二年)

後期の悲劇

オセロ……………(一六〇四年)

キング、リーア……………(一六〇五年)

マクベス……………(一六〇六年)

アントニー、エンド、クレオパトラ……………(一六〇七年)

コリオラナス……………(一六〇八年)

タイモン、オブ、アゼンヌ……………(一六〇七年)

以上悲劇と共に出来たる喜劇に於ては

オールス、ウエル、ザット、エンツ、ウエル……………(一六〇二年?)

メジュア、フオア、メジュア……………(一六〇三年)

トロイラス、エンド、クレツシダ……………(一七〇三年修正)

等がある、が之等も其の根底には前日の快活なる点少なうして悲劇的意義を有てるようになった。喜劇既に然り、其の悲劇に於て如何

に痛酷なる呪詛の叫を敢てしたかは推して知るべしである。

矛盾多き世を慨し、外面菩薩を装ふて内心夜叉よりも怖るべき毒牙

を包める人間の浅間敷さに泣き、撞着多き現世の態の思はしきにつ

く、と感じた詩人が胸奥に湧え返る悵愁を筆に染め出した當時の

作物を讀むた時。我慾に迷へる人間鬪争の巷の悲惨事が紛糾せる現

世の柵に纏れ絡んで如何に大膽に行はれつゝあるかを思はしめて思

はず強き戦慄に襲はれるのであつた。

惱み迷へるハムレットは生歎死歎何れ儘ならぬ缺陷多き人の生を如

何ばかり痛く呪つたらう。哀れなるオフィリアが拙なき戀の運命の

末路の儂なさは如何に。弱きガートルードの哀史。何れ現世の咒の

聲ならぬはない。

八十路の坂を越えながら汚濁を包む優しの笑みと罪穢を飾る言葉の

花に迷はかされたリア王の終焉史。錢は容れられずして怨は長き女王コーデリアが最後の哀れなる物語。有情の人の子は誰か涙の聲を絞つて命運の挽歌に哀れを唄はずして止まれよう。悪鬼人の胎に宿つてイアゴとなり蛇よりも執念く世の和平を呪ふて三寸の舌端に怖るべき毒を呑めりと知らざりし人の悔恨多き末後は何れ涙ながら。あわれ戀なればこそ親をも家をも棄て果てし花羞かしの乙女デスデモーナは戀の祭壇に嫉妬の犠牲となりて非業の最後を急がねばならなかつた果敢なき運命の一生の哀れさ、其の他マクベスに於てアントニー、エンド、クレオパトラに於て或はコリオラナスに於て、タイモン、オブ、アゼンヌに於て暗黒なる人生の裡面を曝露して人間醜汚の形骸を鞭打ちて卑しき傲慢と恐るべき弱點とを呪ひの聲高く罵つた。

彼は一方に於て温雅敦厚なる一紳士として金を貯へては多くの土地を郷里のストラッドフォードに於て購ふた。眞面目なる努力と非常なる勉強は昔ながらに變りはない。が一面に於て其の内的生活の大轉機は斯うして輕侮と嘲笑とを以て人間世界を咒ふに至つたのだ。けれども神の恩寵の御手は彼の頭に置かれてある。荒れ狂ふ冬の海には浪の音高いけれど、紺碧の底に秘めたる秘密を叫くのは静かなる春の油を流したような海に於てきかれる。墓より外に作り得ぬ人の弱き。死より外に麻ち得ぬ人間の愚さに愛想つかして末の目を瞑ふた彼はヘブライの豫言者が呪ひの言葉を繰り返して天日暗かれと祈つたけれども順てはまた不偏の太陽の光に感謝して哀れなる運命の憎まれ兒を憫むの心が起つた。

第一六 豁然大悟す (傳奇劇時代)

荒涼たる人生の曠野に逝き、晩れて一度は咒咀の聲を發した。罪巷に彷徨つては嘲罵の叫び禁め兼ねたこともあつた。妖魔跳梁の世を憎しと思つたこともないではない。天日暗かれと祈の心の切なさはい微笑となつて冷かな眼に世を睨むに至らしめた。けれども此の寂しさ、此の切なさ、此の苦るしさに何時まで耐へられよう。恐ろしき夢はいつかは覺める。昏々として暗い闇の世界の奈落の底へ落ちて行く時、腥風一陣ハツト思つて夢はさめる。シツポリと濡れた汗を拭へば寝心が何となう悪るい。起きて窓を排せば曉の風は肌を涼しい。淡き星の世界の仄々と白み近く晨の空は輝くばかり眩しい。汚れも濁りも今の胸には許さぬ。言ひ知れぬ嬉しさに身も世も忘れ

る。昂ぶつた神経は静まる。胸の痞は解ける。氣もそいりになる。其の時に人は和平な世界の住民となつて眞に悟達の境に入る。千六百七年の師走に沙翁は其の弟なる俳優エドマンズの死に逢ふた翌年の九月にはアポンの河畔の計を傳へ來つた。悲痛の刺激に幾度か興奮した彼の神経は今にして餘りに鈍くなつてゐる。酒れ果てた涙線今更らに絞る由もない。何れは定命の脆き人の身だ。生の怡樂を疑つた身に死の哀怨は解けそうにない。生が幸か死が不幸かそれさへ知れない身には決して命運の逝く所を覗ふの外ない。彼は慈顔忘れ兼ねたる母の死に對して黙するの外なかつたが、其の頃から釋然として胸の疑團は解け初めた。心機また茲に一轉した。斷雲風に拂はれて空漸くに霽れ。明月皎々として千里一色豁然大悟して眞如の月を仰いで最早や前日の沙翁ではない、彼は豁然として悲劇

の深刻なる筆を棄て、平淡醇和なる傳奇劇に走つた。暴風雨の後の世界は平和の輝に満ちてゐる。頑くとして動かかなかつた今迄の態度はなくなつて悠々として迫らす臆せず心の適くが儘に廣裕和樂の世界に遊ぶに至つた。

即ち彼は主としてローマの事蹟を叙べて傳記的に筆を走らせた。喜劇の罪人の寛宥。永く別れたる親子の再會等を主とした。其處には具さに人生の苦楚を嘗め盡した人の床しい影が映つてゐる。此の時代に於ける作物を擧げると。

傳奇劇

- ペリクリオス……………(一六〇八年)
- シムベリン……………(一六〇九年)
- ラムベスト……………(一六一〇年)

ウイニタース、テール……………(一六一〇年)

断片

- ツリ、ノーブル、キンヌメン……………(一六一二年)
- ヘンリー八世……………(一六一三年)

などであるが、右の内断片として擧げたるツリ、ノーブル、キンヌメンとヘンリー八世とは沙翁に代りて立役者となつたる、フレチャ―が其の親友マツシンチャ―の補助を得て完成して舞臺に上ぼせたものだといはれてゐる。

西山に白鳩かんとする太陽の態度は最も崇嚴であつて。夕映の空は實に花やかだ。自己を容るゝには餘りに狭く汚き世なりと呪ひし人生を宏豁なる其の胸奥の一隅に收めて悟達の境域障得なく。眞如の月牙ゆる晴やかなる胸を抱いて悠々自適。圓滿なる人格を持して。

天命の逝く所に従ひし後期の詩人は誠や頓て藪壇を後に自然の曠野に退隠すべき兆であつたのかもしれない。人事觀じ了し。萬難嘗め盡し、神寂れたる沙翁の心には今にして風吹けばとて雨降ればとて此處のみは浮世の外。平和は彼の専有の如くになつた。真如の月に曇りはない。

第一七 荒漠たる都市生活 (望郷の念頻りなり)

精力絶倫の沙翁も長年の奮闘生活に疲憊した。都座に埋れて送り迎へた二十幾年は随分と長かつた。額に皺の数が殖えては舞臺に出るのが大儀になる、倫敦を去る數年前になつて既二度と舞臺は踏まなかつた。最後の二年は創作さへも断片であつたのを見ると一旦は花やかな光明の世界に立ち返つたけれど其時はもう餘程氣憊るくな

かけてたのに違ひない。

最早やすむのことはした。やるだけのことでは爲てのけた。故郷には早くから土地を買ふて今では侮り難いものになつてゐる、考へて見れば世の中の大抵の部面は覗いても見た。甚だしい精神上の苦難も經て來た。人生の味も噛み分けて見た。面白く他愛もなくなつた。しう思つた世の中は案外つまらないものであつた。悟つて見れば是非もなし非もなしで都の生活も他氣なくなる。父も死んだ母も死んだ。都では知己多く近いて語るに友とてもない。轉變の世態を嘗め盡した身には人間の儂なさを泌みくぐと覺えて蠢々してる都大路の人中を歩るいても言ひ知れぬ淋しさを感ずる。輕薄なる才子を相手に齒の浮くような話に愛身をやつすには悟り過ぎてゐる。それ等の仲間にあつて藻掻いて騒いで汗して働いてからが何になる、墓より外に

作り得ぬ人間だ。名譽といつてからが果敢ないものだ。地位も得た、名譽も獲た、成功の桂冠も麻も得た、けれどもそれが一体何になる。吾等の急ぐ目的は冥府の暗き門でないか。死に打ち勝てぬ人間ならいくら意張つて見てからが高がきまつてる。嫌だ。華榮に集る凡恐は多い。青春の身を都に寄せた其の日は誰一人省みて呉れる者もなかつた。が。都の才子に勝ちを制した今になつては訪ひ来る人も敷知れぬ。お世辭もさかされる。媚諂者も多い。ゴ機嫌伺ふ徒輩も澤山来る。人は之を現世に勝利の威力なりと喜びもしよう。得意の鼻を掻かしてもみよう。けれども自分には出来ぬ。親切らしい人々の腹の裡が見え透いて嫌だ。誠實しやかな其の面に嘘八百の偽りの想の程が讀まれるので唾棄したくなる。サリとて無下に禮なき挨拶も出来ぬ、心には怒鳴り付けてもやりたき想をジッ

どこらへて義理にも言葉の一つも交はしてやらねばならぬのが耐らぬ程苦るしい。華榮の門に集り来る人は市をなして居るけれど心から嬉んで迎ふべき人は一人も居ない。千百の人は日毎夜毎に我が前に頭を垂れて握手を覚めるけれど自分の心は哀嘆の悲感に腸断たる、計り切ない。広い世界にたい一人。恚奈淋しい事はない。却つて訪ひ来る人もないならば慰め忘るゝ手段もあるだろうが都人には同情がない襤褸を包む錦の都。刺を隠す美しいのバラの花園。迷ひ込めば恐ろしの蛇に執念くつきまつはられる花の都の住心地は嫌でく耐らない。斯うなると矢も楯もたまらなく静かなる故郷の明眉なる自然が戀しい。秀麗なる丘や河や森や林や牧場や何れ戀しからぬはない。股めしい都の家構よりも汚い田舎の茅屋の方がよい。粹に捌けた都の才人が輕薄なる姿態よりは、土臭くても武骨でも素朴で親切

で飾り氣のないジョンヤトムの方がなつかしい。花と飾つて装ひ凝らした都大路のお轉婆で輕操だレデーよりは地味で眞面目で小心で温雅い村娘の邪なさだ。これほど床しく思はれるかわからない。旅なり。歸ろう、と思ひかけると何をしても氣がすゝまぬ。嘗ては人間を呪ふた程の沙翁だ。世を遁れるなら買生ならねど都會に限る向ひ三軒兩隣。共同栓に朝夕の會釋さへ徹にせない都人の交り。眼と眼に前世の仇敵。今生にも忘れ兼ねたる如くに睨み合つて通せるはたゞ都の住居ながら。再び現世に親善して人なつかしい今の沙翁には。その拗ね方が氣に食はぬ。何の怨も譯もなしに明け暮れの睨み合ひは餘りに曲がなさ過ぎて心淋しい。ならば見す知らず縁もゆかりもない人々でも心の底を打ち明け合ふて涙の限りを泣いても見たい位の今日此の頃だ、迎へてもものことに都落せよう名聞もいらぬ、

地位もいらぬ、血縁多く逝き、知己また去りて誰に語り、誰と親しまん望みもなき今、藻掻き惱むで汗してからが何になる。奉獻せん人もなき現今に至つて筆を執らんも心憂き限りである。沙翁は荒涼たる都の生活に飽いて筆を焚き口を緘ぢた。千六百十二年、春未だ寒き如月の頃其の弟リチャード死してからは愈々都落ちの念を堅くした。千六百十三年、未だ其の頃は町並みも粗末な英京の破風作りの赤い屋根に煙々と初夏の太陽さして町行く人の面に油汗滲もうといふ六月の或日。詩人が久しい問入神の技を振つた地球座が焼けた時。沙翁は既うアポンの河畔に搖籃の昔の夢を繰り返して追憶多き故山の風物に荒れすさむた心を養つてたらしい。斯うして二十八年の英京の生活から錦を故山に飾ることになつた。

神斧を以て鐫刻したる彼の作物は不朽の生命を持つて藝壇に益々其の光を輝かしてゐるけれど詩人が優しい姿は英京の詩壇に探ぬる山がない。偉大の紀念を遺して詩星は自然の懷に隠れた。

第一八 追懷多き自然 (故山に退隱す)

江山洵美是吾郷。誰か故山の風物を誇らぬものがあるう。破れたる茅屋にも追憶多き物語りはある。名もなき杜にも敗殘の心を慰むる温い情はたづねられる。危くも頼れかゝつた里の土橋にも無量の感慨はあるものを。多恨の詩人。荒める胸を抱いて何日迄か家山に背向いて居ることが出来よう。

成程彼は筆を焼いたからとて舞臺を棄てたからとて無爲に其の日は送らなかつた。千六百十三年の三月にはブラツク、フライアー座の

近くで四十磅だして家屋を購ふた。家産を増殖すことは末年迄も怠らなかつた。けれども其處には私に考へがあつたからに違ひない。旅なり、歸るべし、とは晩年の沙翁が心に幾度か繰り返した言葉だつたらうと思はれる。

願みれば英京の二十八年は随分と長かつたが。今更らに歸るとなれば道がに此の年月の憂苦歎樂を偲ばずに居れない。初めて故郷を出た日、一介木強の田舎青年、花やかな希みを抱いて来て見れば扱ても都人の美しかりしことよ。賑かなる都大路を迷ひ疲れて場末の安宿に假寝の幾夜如何にして。生命の緒綱に取り付かんかと途方に暮れし折りの心細さ。馬番としてコール、ポイとしてプロムターとして一步一步辿り行く希望の階段。額に惨む汗拭はん暇もなかりし幾年月の辛苦も今にしてはたゞ一場の夢物語。明日よりの吾身思へ

ばまた幾何の感慨に胸の痞を覺ゆるのであつた。年々に一度は必ず通つた筈の故山への通路も、今年都の住居を盡むで歸るとなれば道中の山川の眺めも一しほに思はれる。迎ふる川は喜べるよう思はるれど、見送る杜には別れの涙がある。三日泊り驛路、百哩餘の旅なれど四周の風物今日のみは常とは違つて有情に見ゆる。

ストラッドフォードの土地を一足踏むでは身も心も三十餘年の昔の若やかさにたち返る。

アポンの流れは昔ながらに清い。アーデンの森は今も崇殿の姿をかへぬ、菩提樹の蔭の町の寺院の塔には夕星速く瞬いてありし日の事ども語り面である。零落の暗さに耐へずして一夜。凡ての係累を脱してぬけ出でたヘンリー町の父母の家は、なつかしや其の儘に今も

残れど住む人は見ず知らずの赤の他人。窓に凭れて都の空に憧れたりし其の目を茲に偲ぶとき慈顔彷彿として相逢ふの日なく涙は一しきり敗殘の袂に絞りあへぬのであつた。

草青き牧場に角笛の曲長ふして楡の繁茂に罫を急ぐ小鳥の聲喧しい夕暮の町を往来人は變り果てゝ知る人とてもない、ないも道理、當年十九の白面郎の面には皺の數の多さ、輝くアポンの流の畔涼風に梳らした緑の髪は最早や半白になつてるのだもの。

旅に疲れの身を忘れて氣もそゝろ、たゞインクと新しく購ひし吾が家に歸れば出て迎ふる妻の、さても老けたる其姿それに續く娘の大人びたる様子を見ては、ア、吾が老いたるも理やな。

されど。昔は甘き戀を語りし紅の妻の唇色褪せたればとて、嘗ては熱き想に相抱いて心ゆく迄胸の血を騒がせし其の手に皺の數殖えて

美しかりし髪に昔の香なくなつたればとて。吾れも共に老いたればこそ都に惜まるゝ名を棄て、希望を他所に歸り來しものを成長せし娘が身の幸をたゞ一つの樂みに、迷みに長からぬ行末を安樂に送らんものど願えるなれば。………荒蕪の胸を抱いて詩人は温かき宿りを家族の情の蔭に覓めたのであつた。

長年放浪の旅に疲れし身を自然の平和なる懷に養はんとした。世は移り、人はかはつたけれどストラッドフォードの野や杜や川や牧場は昔ながらに美しい。父や母や叔父や弟や家親の多くは逝いたれども。残る妻子は健全であつた。

面白き物語りに幼き記憶に培つて與れた古老一人も今あらずして、遊び暮し、語り明した竹馬の友も變り果てたが。變らぬは嬉しや昔

ながらの素朴の人情。詩人の歩は穩かであつた。

第一九 悲慘なる晩年 (退隱後の沙翁)

敗れたる胸を抱いて望み多き藝壇を後に故山に歸つた沙翁は舊に依つて美しき自然の平和なるに喜んだ。妻子の健康にして殊に娘の甚だしく成長せるを見て心から嬉しく思ふた都の便りにきいてゐた土地の者は錦を飾つて歸つた沙翁を迎ふるに親切であつた。今日の彼は名望もある、財産もある、地位もある、都人さへ蔽ふた彼だもの田舎の者は心から尊敬した。

紳士の家庭として富も十分な一家は賑やかであつた、沙翁は喜んで家庭の人となつた。

長女のスサンナは數年前にドクトル、ジョン、ホールと結婚して今

は五つになる孫までもうけてゐる、妹は今年二十八の未だ獨身で妻と共に新開の町に住んでゐた。沙翁は其の中になつて家族が情に厚き奉任を享けんことを期してゐた。

當時英國に於ては地方に於て清教徒の勢力非常であつた。ストラツドフォードの町へもビュリタニズムは滔々入り込みて来て全市を風靡してゐた。彼の家族も早く其の信徒となつて其の妻も其の娘も娘婿も皆熱心なる信仰をもつてゐた。沙翁はカソリック教徒である、彼はロンドンでも清教徒の爲めに惱まされた。新らしき彼等の勢力は悔り難いものであつたが、それでも英京では未だ十餘年も昔に村芝居をも閉鎖した地方の勢力に較べては爲し易い点があつた、成程國會は條例を設けて加持力を壓へたけれども、彼は卓爾として世に出た。彼は清教徒の花々しい勢力に抗することはして來たが頼

む樹蔭に雨洩りしよりも驚かざるを得なかつたのは家族がビュリタニズムを奉じし餘念ないことであつた。

怖ろしきは宗教の力である、度し難いは頑なる信仰の子である。彼の家族は清教徒として甚く凝り固まつてゐた。セークスピアは之を見て長大息せざるを得なかつた、身も魂も信仰の熱火に鍊り固めた彼の妻アンが良人に對する態度は先づ沙翁の心を不快ならしめずして止まなかつたろう。頼りに思ふ娘のスナンナも母が信仰に感染れてゐて仲々に父を慰めるべくもない。娘婿も同様である。

セークスピアがたゞ單に一家の家長として彼等の尊敬の中心とならうとするならば何の失望することもなかつたろうが、荒涼冷寞なる都の三十餘年の生活に疲憊せる身心を安んせんとした彼は餘りに其の期待の外れたることに惆悵たらざるを得ないのであつた。

既に彼れは家族と信仰を異にしてゐる、妻子が神の純正なる御聲を
 きかんと相聴いて祈願を籠むるの時沙翁は孤獨の哀愴をアポンの清
 流に流して黄昏の野に何もものかに憶れてゐたことだらう。
 否そればかりではない。シエークスピアをして一層心淋しく思は
 しめたのは家族の無學なことであつた。
 情に渴せる詩人の心を慰むるものは大なる同情にある、大なる同情
 は詩人を解する者に免むる外ない、大詩星の光芒の一端をも覗い得
 ない彼等家族の者は慥かに詩人の期待に背向かざるを得なかつた。
 其の良人、其の父、其の兄を解するには餘りに低かりし家族の智識
 は頓て他方面に馳せて最も頑愚なる清教信徒として詩人の心を傷め
 たのであつた。
 アンには戀を語つた昔の優しき情がない。家に在らざりし父と娘の

愛情も思つた程ではなかつたらう。さりとして今更らに家族の者に何
 を強ゆる譯にもゆかぬ。
 冷莫たる心の荒みは慰むるに所がない。淋しき都の生活も憚ばれる
 さらば再び都に……けれども今は筆を執るも物憂くて耐らぬ。舞
 臺に出るなどは尙更らのことである。と言ふて輕薄なる都人のお世
 辭もさへたくな。淋しい心を慰むるものは追憶多き自然の外にな
 い堪へ難き想を寄するものは麗はしき田園である。詩人は斯くて敗
 れたる胸を平和なる風物に養ふの外なかつた。
 三者から見れば悠々自適餘生を平和なる田舎に送る沙翁の晩年を幸
 福に思はれる。心なき人は之を羨むだらう。
 功成り志遂げ富と名譽を靡ち得た沙翁が廣き其の額に愁の雲深く閉
 して月朧なる野徑を憶れるのを見た里人は扱ても可笑しき人かなと

怪しむただらう。會心の微笑に接するの日なくして晴やかなる聲きく由のなかつた家族の者は都の生活に扱ても執拗たることよと愚痴つたかもしれない。

懐しきはたゞ自然である。或時は父母の家の邊を逍遙して歸るを忘れたこともあつたらう。時には父母の墓に詣で、不孝の罪を泣いて謝したこともあろう。凡て夢と過ぎし其の日を省みては如何になつ

かしく思はれたことだらう。希望や功名や今にして幾何の價值あるかを疑つたとき。美しき自然に對して詩人は苦笑を禁じ得なかつたらう。

墓壇を棄て、英京を去つた詩人は斯うしていつか人の世から段々遠ざかり逝くのであつた。

第二〇 詩星墮つ (沙翁の死)

二十八年、英京の勤勞に疲憊たる心を安んせようとして温かかるべき家庭に敗れたる沙翁は寂寞の嘆きに荒める想を自然によせた。會堂の鐘の音菩提樹の森に沈む夕は慰めなき憧れの眸をあげて輝く星の數を讀むだらう。父母の墓邊に名無鳥の怪しき叫び断續して矢嚆に傷める胸をそゝいる夜は雲間を覗く月に落ちたる吾影の篋れに泣いたらう。希望なく慰樂なき月日は甚く長い。

斯くては百萬の富も何にならう。千載の偉業も幾何の價値を認められよう。三十年の奮闘に得たるものは此の心の愁と悶へのみである沖々の情緒之を遺るべき處はたゞ自然あるのみだ。自然、而かし自然は劫初の昔より無終の後の世へかけて深き冷歌を守つてゐる。

仰いで天に訴ふるとも、俯して地に哭すればとて。天宏寛たり、地渺茫たりで、答へず語らず、况や慰藉を興ふることをやである。ギオデの所謂公開されたる秘密の謎を解き得ない人間は測り知る可らざる宇宙の大意志に絶つて自ら慰むるには餘りに小さい。潺々たるアポンの清流にも悵愁の胸洗ふ由がない咬たる。月に此想映さんにも力及ばぬ。跟々としてさまよい出で、白露稠き野徑の草叢に蚤と共に泣き明した時初めて胸の痞へが解けて熱い涙が頬を傳ふ。落花を羨み、黄落を唄ふた彼は、斯くて縮々たる情緒を僅に忘れるのであつた。哀真の悵愁仲々に慰むべくもない。彼は茲に於て酒を呼んだ。

詩人が致死の病氣を酒敵にゑたものだといふ者さへある、其の事實であるかどうかは別として末年の沙翁が如何に酒に親しむたかやわ

かる、枯腸に泌み渡る酒の味。それは上戸の外に知る者はない。濃厚な沙翁が果して眞に觴中の妙機を悟り得て酔中の仙を學んだかどうかは疑問である。

けれども淋しさに堪へられぬ、苦るしい。切ない。せめてはたい少しなりとも情の香に此の悶へ忘れたい。愛の小蔭に冷へたる心を温めたいと家族の團樂の筵に列つて凡ての悪感而去らうとする。忍び堪へられるだけは努めて辛抱してみても。妻の心は家庭にない、娘の魂は父の側に居ない、妻子の口からのみは言はずともものことをさく藻抜の殻の形骸と對坐するようなものだ。折角の苦心も甲斐がない、却つて淋さは増すばかり、荒々しく立つて出掛ける後では二つの形骸が氣味わるく笑つてゐる。エ、此の懊惱を何とせよう、まよよとの途も定めず外へ出る。家の近くに酒保がある、中からは強い

酒の香がしてゐる、奥では陽氣な人の聲がする、其の陽氣さがなつかしい、其の笑聲が羨ましい、思はず足は旗亭の闕を跨いでる。案内イ。の聲は耳に入らぬ、導かるゝまゝに奥へ通る。註文をきかれても心は茲にない。ウ、ム何でも早く……と隣からも賑やかな笑聲がする、他人はなせにあれほど面白いのだろう、羨ましい、腕を組んで譯は知らねど面白そうな話聲にきいておられてゐる、其處へ酒を持つて来る、注いで出す、夢中で手に取る、グツと飲み、腸に込み込んで身慄ひする、思はず眉を顰める、フト氣が付くと、自分は酒屋に居る、隣ではまたドツと笑ふ、ツイそれに釣り込まれて面を顰めながら觴を重ねる、何日か氣が遠くなる、家が動き出す、人の面が二つに見える話聲が歌のようにきこえる、現世主義の哲人が歌つた歌なども口吟むで見たい氣になる。フラ〜と自分の心が自分の

五体から抜け出る。自分が未だ盃を唇にあてる毎に面を顰めるのがおかしい自分で自分を笑ふ、と見てゐる人も罪のない微笑を洩らすそれがまたなにともいへずなつかしい。此方も酔ふてる、先方も酔ふてる、一寸した動機から話しかける、互に盃も交す、既う吾もない、人もない、怨みもない、惱みもない、苦もない、悶へもない、踏々として立つ、送り出す店の小者が定文句のお世辭も今日は嫌氣がない。跟々として家に歸る。出迎へた妻子が顔を顰める。顰めた顔の格構がおかしい。酔ふて歸つても一家の家長だ。良人だ、父だ粗畧には出來ない。奥へ伴つてつて寝かす。ホ、今日はまた親切だなア、と何でもないことが嬉しい。夢面白く眠る、其の夜は何だか三十年も若返つた氣になる。酔が醒めて眼が開いた、起きると妻の面は例によつて澁い。娘もな

んとなう空々しい、昨日のことを思ひ出す、ツイまた飛出す。
斯うして酒の味が忘れられなくなる。

そらしてゐる間にはロンドンの友達でジョンソンやドレーンなどが遊
びに来る。共に酒を飲む、昔を語る、興が湧く。

丁度千六百十六年には兼ねて気がかりであつたデューデイスの身始末
をつけた。二月十日酒屋の息子トーマス、クイネーと結婚式を挙げ

た。近頃は大分健康も損してゐる、が良い花婿が出来て見れば妹娘
のことも安心できる、友達も嬉びに来て呉れる、自分も安心して。

気が弛む、ツイ飲み過す。
シエークスピアは病床に呻吟する身となつた。

其の年の三月二十五日を以て遺言状を作つた。
長女ヌサンナは當然其の相続者に定められた。姻戚の一同へ、それ

〆 紀念の金品分與方を遺言状に認めた。

今はたゞ死を待つのみだ。

爲すべき事はした。整理するものは始末た。何の心残りもない。久し

く淋しい生活に疲れた身だ。死は仲々に心易い。

主の日は近付いた。今は嬉んで天の王座に逝こう。

翌四月二十六日……人類の紀念すべき日は来た。アーデンの森に

天樂起つた。紫雲アポンの市を包むた、其の日詩星は地に墮ちた。

ウキリアム、セークスピアは此日溢馬として簀を易つた。

越えて二日トリニチー寺院に遺骸は葬られた。

享年五十有三。

英國の大家名士は多くウエスト、ミンスター寺院に葬られてゐるが
獨り沙翁の墓は秀麗なる故山にあつて長く人類が渴仰の地となつて
ゐる。

第二章 沙翁の作物

第一 吾等の紀念

沙翁の戯曲はまた自然の産物であつて天地と其の深を同じうしてゐるとはノバリスの評である。實にカーライルの謂つた通り沙翁は古來詩人中の王であつて、歴史の存在する世界に於て。また世界の文壇に於て自家の記録を残したる大智識である。沙翁の前には沙翁なく、沙翁の後にも沙翁はない。

彼は政治家の世に出づる時分のようにゴ馳走の振舞や、黄白の撒布や、種々の方策を弄して喧嘩を極めた揚句に出たものでない。

沙翁は音もなく香もなく奇蹟の如く現はれた奇蹟の如く去つたのであつた。世界は黙々の内に彼を迎へた。天は此の詩聖を黙々の間に

世界に下し給ふた。奇蹟の如き詩人の出現に對して世界の人類は黙して彼を拜跪し。其の逝くや黙して彼を葬つた。

五十三年の沙翁の生涯は短くはなかつた。がセークスピアの戯曲が其の深を天地と同じうするが如に。其の作物の生命も天地と壽命を同じくするのを思ふのであつた。

吾等が凡愚の眼識を以て此の大詩人を評せようとするのは大膽すぎる、既に此の人を傳せんとするさる潜越な次第である。沙汰の限りである。敢て今茲に沙翁を評價し其の作物を云々せようとは言はぬ汗牛充棟も嘗ならぬ詩人に對する先輩の書を措いて今更ら何を言はふ。が田舎の一盜鹿青年が都に出て天下の悲劇作者となり。人類に大紀念を残した五十三年の其の生涯を叙べた吾輩は順序として茲に其の劇の筋、年代、時代の特徴等について少しく紹介せようと思ふ

のである。
 然しながら大詩聖逝いて三百年沙翁研究者相踵いで出で彼に關する
 書は山ほどあつて一生を沙翁研究に費す學者もあるが未だ一人の上
 く彼を解し得たる者なく。依然として彼の秘庫は深く閉されてゐる
 今日。沙翁を知らんとする者に向つて吾人はたい多く讀みて近く彼
 に接せよと言ふの外ないのである。
 値かなる著者の智識で今將た何を多く語れよう。
 セイクスピアの戯曲は四期に分けて見ることが出来る、尤も彼の
 著作は凡て倫敦生活二十八年間の所産であるから、其の轉化の徑路
 は前にロンドン生活に述べたような有機であるのだ。
 今左に表別にして見ようなら

第一期

沙翁の改作

タイアス、アンドロニカス……………一五八八……九〇
 ヘンリー六世(第一篇)……………一五九〇……九一

初期の喜劇

ラプス、レーポアス、ロスト……………一五九〇
 コメデイ、オブ、エロアス……………一五九一
 ツー、ゼントルメン、オブ、ヴェロナ……………一五九二……九三
 ミッドサムマー、ナイト、ドリーム……………一五九三……九四

初期の史劇

ヘンリー六世(第二、三篇)……………一五九一……九二
 リチャード三世……………一五九三

初期の悲劇

ロメオ、エンド、ジュリエット……………(一五九一)

中期の史劇

リチャード二世……………一五九四

キング、ジョン……………一五九五

第二期

中期の喜劇

マーチヤント、オブ、ヴェニス……………一五九六

後期の史劇

ヘンリー四世(第一、二篇)……………一五九七：九八

ヘンリー五世……………一五九九

後期の喜劇

ターミンング、オブ、ゼ、シユルー……………一五九七?

メリー、ワイヅス、オブ、ウキンズル……………一五九八?

マツチ、アヅー、アバウト、ナツシング……………一五九八

アズ、ユー、ライク、イット……………一五九九

ツイーセルフス、ナイト……………一六〇〇：〇一

オールズ、ウエル、ザット、エンツ、ウエル「六〇」……………〇二

メジユア、フォア、メジユア……………一六〇三

トロイラス、エンド、クレツシダ……………(一六〇三
一六〇七修訂)

第三期

中期の悲劇

ヂユリアス、シーザー……………一六〇一

ハムレット……………一六〇一

後期の悲劇

オセロ……………一六〇四

キング、リリア……………一六〇五

マクベス……………一六〇六

アントニー、エンド、クレオパトラ……………一六〇七

コリオラナス……………一六〇八

タイモン、オブ、アゼンヌ……………一六〇七・〇八

第四期

傳奇劇

ペリクリース……………一六〇八

シムベリン……………一六〇九

ラムベスト……………一六一〇

ウキンタース、テール……………一六一〇・一一

断片

ツ、ノーブル、キンスマン……………一六一二

ヘンリー八世……………一六一二・一三

右の内タイアス、アンドロニカスと、ヘンリー六世第一篇とはシェイクスピアが改訂したものに過ぎないから之は沙翁作物外に置かねばならぬ、またツ、ノーブル、キンスマンと、ヘンリー八世とは前に記した通り沙翁一人の作でない。

尙此の他に沙翁全集中に編せられてたり、或は沙翁の作だと云はれてゐるものが十餘種ある。而し何れも十分な外證があるといふではなくて其の中の或る部分を捕へ又は讀者の印象によつて沙翁の作だろ。沙翁の作に違ひないと断論を下したに過ぎない。だからして随分と議論があつて今日に至つても果して何れが是で何れが非であ

るか判断に苦しむ譯である。
沙翁研究者として最も熱心で造詣深かつた彼のフリエーは是等の諸作に對して大膽に作者を指定したが之とて全く信を措くことは出来ない。今其等諸作の名と初版の年代を左に掲げよう。

- アーデン、オブ、フキーベアーシヤム……………一五九二
- フエア、エム……………一五九二初演
- ロクワリン……………一五九五
- エドワード三世……………一五九六
- ミュセドラス……………一五九八
- エ、ウオーニング、フオア、フエア、ウーメン……………一五九九
- ゼ、ライフ、エンド、デッサ、オブロード、クロムウエル……………一六〇二
- セ、ロンドン、プロデガム……………一六〇五

- ゼ、ビエーリタマン……………一六〇六初演
 - エ、ヨークシャイヤ、トラゼディー……………一六〇八
 - ゼ、メリー、デブキル、オブ、エドモントン……………一六〇八
 - カルデニオ……………一六一三初演
 - ゼ、バース、オブ、アーリン……………一六六二
- 等である。此の他に劇以外の作をあげると。

- ヅキナス、エンド、アドニス……………一五九三
 - リユークリーズ……………一五九三…九四
 - ソネットツ……………一五九五…九六
- の三篇がある。右の内ヅキナス、エンド、アドニスの情詩は前にも記した通りシエークスピアが自分の保護者たる。サウサムプトン伯の恩誼に酬ひんが爲めに千五百九十三年に之を作つて全伯に捧げ

たものである、またリユークリスは其の翌年に詩人と全郷の人である。フキールドが出版したもので忽ちに數版を重ねるの好評を博して詩人の名譽を高めたものであることは前に叙べた通りである。沙翁の著作は斯の如く澤山ある。沙翁に關する書籍は數へきれぬ程ある、而も沙翁の生涯が奇蹟である如く、彼の著作も亦估價するを許さない。人類は此の大詩星を永遠に紀念せようとする。而もそは何の故に？……遂に解らない。

神祕の帷幕の奥深くして凡俗の入るを許されてない。千百の沙翁學者が其の一生を此の詩人の爲めに捧げて見ても、眞に天才を知るものはたゞ天才あるのみである。汗と涙で詩人が宇宙の覆載を闡明したる天與の秘鍵を奪ひ得るものならば、沙翁の後に沙翁は澤山出たことだらう。が而し人類は一人の沙翁を得たが爲めに唯一つの誇りを有つことが出来たとしてみれば、逆ものことに吾等は紀念すべき此の光榮を感謝するの外ない。

第二 修養時代の院本 (第一期の戯曲)

百萬の英人は棄つるとも、ストラッドフォードの一盜鹿青年はすつる能はずとカーライルをして叫ばしめた沙翁は天上の日月の如くに洪大赫耀炳乎として照らさる限なく通徹せざる所がない、其大人物を窺ひ其の大文字を學ばんとする者は漫に漁讀してみたとて仕方がない。少なくとも秩序ある眞面目な態度に努力研究するを要する。前にも叙べた如くにセクスピアのロンドン生活の三十餘年は其の境遇に於て非常なる轉化をしてゐる。彼は倫敦に於て修養し英京に於て成功しロンドンに於て詩人的生涯を終つたのである。初めてロン

ドンに出てから二十八年の間は刻一刻、日一日と進歩し向上し轉化してゐた彼の總ての變遷は初めと終りに於て天地の差がある、其の作に於て特に甚だしく之が覗はれる、アボン河畔の一青年、山出しの馬番が。一代の名聲を荷ふて天下の悲劇作者として都を去つたといふ其の違ひよりはもつと甚い。

だからしてシエークスピアを研究するには愈々時代の區分をすることが必要になつて來るのだ。而し之も學者によつて違ふ或者は三期説を主張し或學者は四期説を唱へる。デ其の年代などについても種々の点から推斷を下してゐるが一二を除く外は確たる據り處は解らないが。今最も普通に行はれてゐる四期説をとつて一通り紹介しよう。

シエークスピアの修養時代、即ち第一期は既記の通り改作翻案の

時代で言はゞ準備時代といつてよいのである。

此の時代の作は脚色も簡單であつて複雑なる人生を描寫する迄に至つてない、技巧に於ても擬古文の風があつて。元より洗練されたる筆でない。地口も多い。駄洒落も澤山ある。比喻も機智も無暗に引き延したもので。外國語なども矢鏃に使つてゐる、韻句が非常に多く其の種類も澤山ある、喜劇の中には有韻の雜体句を交へてゐるのがあるが是れは此の時代の特徴である、人物なども男性には野卑で殘忍な者が多く婦人には險惡邪曲な女丈夫の頑強なる機が描かれてゐる。今前に掲げた表別の順次によつて此の期の作の大体をいつてみよう

沙翁の改作

△タイアス、アンドロニカス。此の劇の前にもいつたようにシエークスピアが當時の人のよく知つてゐた舊劇を採つて其の主なる

人物二三に修訂を施したものでらしい。其の筋も殺伐なものであつて詞体が他の諸作と大變違つてるので彼の作でないとの説も喧ましいけれども最初のフォリオ版にも沙翁の作として入れてあるし、ミアスの著書にも詩人の作としてあるから、之がマロー一派の作に似てるからとて直ちに否定することも出来ぬ、先づ沙翁の改訂修訂したものとの説に従ふが穩當だろう。

△ヘンリー六世（第一篇）初めの方にシエークスピアの筆致を認めることが出来る、これもマローの作だといふ者があるが確な據り所がある譯でない。筋はホルルの記録から採つたもので前同様詩人の改作に属するものだ、斷つておくが初期の史劇として出たヘンリー六世第二、三篇とは少しも關係のないものである。

初期の喜劇

△ラブス、レーボアス、ロスト 此の劇の筋は何からとつたか瞭でないが都會の生活、田舎の習慣など仲々に抜目なく描出されてゐて機敏精緻なる詩人の洞察眼は此の時からして夙くも現はれてゐる、人物は談話、洒落に富んでて。アルマードや、侍従や女官の如き何れもよく働いてゐて中には歌謠や短詩を交へてある。

△錯誤の喜劇 雙兒の餘りよく似てゐる所から一騒動が持ち上るといふ筋でブラウツスの拉丁喜劇メナエクミの翻譯によつて書いたものだらう詩人は此の劇に於ては人物性格を描くといふよりも動作の紛糾に重きを置いたらしい。要するに之も前へと同様輕妙洒落な趣を具へてゐる。

△ジエロナの二士 詞体は詩歌的であつて各節に美しい詩句を交へてある、が全体からいへば沙翁が失敗の作だとの説が多い。性格の

描寫なども疎雑で全体の構造なども脆弱である。特に最後の幕などは之が沙翁の作だろうかと疑はれる、筋はモンテマヨール（西班牙人）の「牧羊女フェリスメナの罌」から採つたのだろうといふことである。

△真夏の夜の夢 當時の某貴族の婚儀を祝して作つたのだとのことだ。其の筋はチヨーサーの武士譚やクリーンのヂエームス四世等から來たらしい。最も愉快な作であつて所謂ロビン、グード、フェロ

初期の史劇

△ヘンリー六世（第二、三篇） ホールの年代記から材を採つたもので第二篇と第三篇の一部とは全く沙翁の作だとのことだ。がマールとピールの合作を沙翁が改竄したものだとの説もある。事實は之

を歴史と對照すると大層異つてゐる。要するに之は舊劇の改作である。

△リチャード三世 シニークスピアの作中最もよく舞臺に上つたものゝ一つでサー、トーマス、モリアの傳記の筋である、其の臺詞は修辭的であつてヘンリー六世の後日譚である、之を作つた年代は明でないが、通常ヘンリー六世に續いて書いたものだろうといつてゐる。

初期の悲劇

△ロメオとヂュリエット 之も書いた年代は諸説あつて定つてゐないが大體は前に書いた通りである、材をアーサー、ブルークの詩篇と原作者伊太利小説家バルデルロの傳記にとつたものでマール、ナッシュニ合作のデキードーにも據る處あつたらしいがマール、キューシ

オとタイバルトの決闘と、ロメオとパリスとの墓場の出合などはシ
 エークスピアが新らたに加へた趣向である、此の劇が抒情詩的傾
 向をもつてゐるのは恁奈材料を其の青春時代に執筆した故で詩人は夙
 くから幾度も書きかけて見たが其の都度思はしく書けないので幾度
 も修正して千五百九十七年頃になつて初めて今のものが出来たらし
 い何しろ原作では數ヶ月に亘つてゐる出来事を五日間に縮めてしまつ
 たのだし、熱狂なる南歐少年の戀語りと來てるから強激なものである
 今左に其の梗概を紹介せよう。

伊太利でヴェニス市の市に亞いで賑やかな町は美しいヴェロナ市である。
 此のヴェロナ市に君臨せる者をエスカラス公といつて、其の下には古
 くから相嫉視せる兩個の豪族がある、代々怨敵の如く反目して
 度々靜闘を起したが兩家の確執は依然として解けない。だから奴僕

の末に至る迄、迭に睨み合つてゐる。
 モンテীগ家の犬を見てさへ直ぐに激する」
 カブレット家の家來は斯ういつてゐる。言ひ遅れたがエスカラス公の
 下に事へる兩家とはモンテীগ家とカブレット家との兩家のことだ
 カブレット家の家來が斯うなら、モンテীগ家の下郎も同様の感
 カブレット家の者に抱いて居る。だからして途中で兩家の者が逢ふ
 たならキツト男なら扱て見いと何れからか喧嘩を買ひ出す、而して
 市中を騒がす。エスカラス公は斯様に兩家の者共が宿怨仲々に治ら
 ぬを見て再び市街を騒がす時は治安妨害の罪科は命を以て償はせる
 と嚴命を下された。

斯ばかりに犬猿も雷ならぬ兩家の愛娘愛郎が戀の悲劇から遂に和解
 するに至るといふ筋である。

モンテীগ家の獨り息子に性質温雅で徳望もあるロメオといふ少年がある。エロナ市民が誇りとする程の好個有爲の青年であつたがフト戀に見込まれて戀ふる女に見離された。

ロメオは覆面の戀の盲神が悪戯の征矢に胸を傷けられてよりは。朝も朝も涙は露に振加はり、吐息は雲に雲を添へつゝ森の茂みを彷徨ふて、横雲の彼方なる曉の女神の寢所から朗かなる旭が小暗き帷幕を掲げ初めると悄然顔に歸つてきてたゞ一人己が室に閉ぢ籠り光明を屏ふて終日深き物想に沈むようになつた。

ロメオは實にカブレット家の一族なるロザリン嬢を戀焦れてゐる。處が此のロザリン嬢はダイアナ女神の心を持つてゐる、貞節の體に身を固め戀童子がかよわき弓などでは傷をも被けそうになく、甘言で攻めても寄せ付けない鏡き流喝で攻撃しては外して仕舞ひ。聖者

も迷ふ財貨さへ袂を閉ぢて受け付けない。それが爲めにロメオは猶ほさら一生獨身で歸りなしに其の美を葬り去らうとするのを惜しむ想ひこがれて生きながら死せしも同然の身となつた。

ロメオの従兄ベンポリオはロメオの此の頃いちらしく其の両親の嘆き氣の毒に思はれて言葉を盡して若き戀の惱みを他に移させようとした。テ廣く世間の美人を見たらロザリン以上の戀人も覓められようといつて諫めた。ベンポリオは火で火を消し、痛みで痛みを癒す考、それには他の美人てふ病毒をロメオの眼に注ぎさへすれば古い病毒は亡くなつて終ふだらうと思つて頻りに諫める折、カブレット家の僕が今夜同家で假裝舞踏會があるので案内状を持つて招待に行くのに逢ふ。無筆の下僕に其の招待状を讀んで呉れと頼まれて讀んで見ると揃ひも揃ふた、美人の招待之を見たベリポリオはよい機會

と思ふので。カブレット家の此の常例の宴會にはロザリン嬢を始めとしてエロナの市中の美人が集まる筈なれば今宵其處に忍み込むで思ひ迷へる愛戀の白鳥が鴉に過ぎぬのを思ひ直したがよいとすゝめる。古今を照らす太陽もロザリンの美しさに及ばぬと思へる。ロメオも強いての勸めに切めて戀しの人を委見てなど慰められんと遂に同行を約する。

其のカブレット家の愛嬢に今年十四になるジュリエットといふ美しい乙女がある、エスカラス公の近親の貴公子パリスといふのが望みをかけてカブレット夫妻を説いてゐる、今宵はパリスも會に来ることになつてゐるがジュリエットの心は未だ白うて仲々に戀の色香に染むでは居らぬ。

ロメオは其の夜假裝してベンポリオ等と共にカブレット家の舞踏會

に忍び込む。而して舞踏の席に出た時ベンポリオの言葉は遠はずして彼は一人の美人を見た。ロメオは初めて今夜迄は眞の美人を見なかつたのだと思つた、我心は果して戀をして居たかと疑つた。

此の美人は即ちカブレットの跡取娘ジュリエットである、ロメオは進むで其の美人にキッスを免めたが乳母に其の名をさくに及んでおゝ何たる悪因縁、我生命は今や怨敵の掌中に握られたも同然だと嘆いた。ロメオ痛恨の胸を抱いて歸途についた、がジュリエットも一目ロメオを見るより心は戀の囚はれとなつてゐた、歸らんとする意中の人の後姿を眺めて彼の方は誰ぞやとさげと乳母も知らぬに、せめてお名前をきいてこよとやりたる後にて、若しか夫人あるお方にもあらば此の身が婚禮の新室はやがて此の身の墳墓所であると嘆く。乳母からモンテグ家の一人息子ときいて、今更らのように兎は

れた戀を嘆くのであつた。
 が一旦歸途についたロメオはどうかにかして今一度………と後戻りして間に紛れて塙を越えカブレット邸の庭園に忍び込むで戀の誠に導かれてヂュリエットの寢室の窓の下にと辿り来る。思は同じヂュリエットも儘ならぬ戀の悲さを身に覺えて耐へられぬ思を窓に凭つて輝く星に訴へる。悠々たる白雲を踏みて空翔りゆく天使の如き姿を渴仰の眼に認めたロメオはヂュリエットが闇に叩く其の聲をきいて想の丈を打ちあける思は同じヂュリエットと結婚の式さへ済ましたら運も未來も貴郎の前へ投出して何處へなりとあなたを御側は離れぬ覺悟の程を語つて相思の戀は譯もなくなりたつた、二人は明日秘密に結婚をせよといふ約束をして別れた。
 嬉しき戀を得て魂も身に添はぬロメオは曉のまだ仄暗き途を歸ろう

として中途から老僧ラウレンスの許を訪ねた。
 今し柳條の籃に藥草を摘み、芳ばしき花を盛らんとて出るに逢ふて昨夜の一伍一什を語つた今日兩人の爲めに陰に縁を結ばせて呉れと嘆願した。
 上人は初めは一度ロザリンを戀うて苦き幾斛の涙に青白き頬を洗ひし者が古き呻吟の聲まだ消え果てず頬に涙痕鮮かなる今日古き戀をすて、新らしき戀を掘り出す節操の軟弱なのを責めてはみたが。思ひ返せば之が爲めに多年兩家の確執を解く由もあらばと考へて遂には之を諾した。
 ロメオはヂュリエットの乳母の使として來たのに此のことを告げて其の日の午後ヂュリエットを上人の庵に忍び來らせて此處に首尾よく結婚の式を済ました。

其の秘密の結婚を済ませてから一時間にして悲劇の動機となる大事件が起つた。

昨夜の假装會にロメオの忍び込みに来て居るのを知つたカブレット夫人の甥にタイバルトといふ青年がある、ロメオの姿を見るや劍を抜いて斬うと喚いたがカブレットが敵ながらも徳望ある好青年ロメオを我家で傷けたくないと制止したので濫々どまつたが、腹がたつてならぬデ。翌朝直ちに決闘状をロメオに送つた。ロメオは怎奈ことどころではない昨夜からまだ家へも歸らぬから居あう筈がない。

タイバルトは其處此處とロメオの行方を探ねてゐると其の日の午後偶然にも路傍でロメオの親友でゴロナ公の近親なるメルクチオとロメオの従兄ベンポリオに遇ふたので何地へロメオがいつてるかきいてる折ロメオが丁度結婚を済まして程なく來るのに遇つた、ロメオ

の心はいそいそとしてゐる。

タイバルトは口を極めてロメオを罵つた。如何にしても決闘をせよと挑むだ、ロメオ、汝は悪黨だと迄いつた。がロメオは最早や昨夜の彼でない。今のさきヂュリエットと嬉しい婚儀を済ました身には敵ながらも戀人の血縁とあればなつかしい。

タイバルト殿、某には貴殿を愛する理由がござる、そのわけがそんな挨拶を受けても立つべき腹を宥めて呉れる」といつて相手にならぬ。

何處までも決闘する氣のタイバルトから「お扱きなされ」と迄挑まれても「カブレットの家名を自分の家名同様になつかしく思ふといつて柳に風と受け流す。

其の従順で、不面目で、卑怯な屈從に親友のメルクチオが却つて腹

を立て、劍を抜いてタイバルトに向ふ。兩人の仕合ふのを見てロメオも劍を抜いて割つて入り之を鎮めようとする。ロメオの腋の下からタイバルトはメルクチオを刺して置いて逃げて行く。勇敢なる精神のメルクチオも不意の痛手に二耐へて其の靈は雲の彼方に慕ひ寄つてしまつたときいたロメオは追に勘忍もなくなつた戀なればこそ、愛なればこそ、忍び耐へてゐたもの、斯く友を殺され名を汚されし上は………と思つてる處へタイバルトが又も引き返して来る。今度はロメオから進むで挑戦する。此の仕合にてタイバルトはロメオの爲めに討たれて死んだ、と問もなくエロナ公の取に此の騒動が入つて、ロメオは追放の宣告をうけるに至つた。人目を忍んで嬉しい結婚を済まして歸つてジュリエット。今宵戀し

き人の忍び来るを思ふて夕を待ちこがれてゐる。「フェーバヌ（日神）の御輦の馬も疾く馳せて西の海なる御宿へ早う急いでたもれいとう」と今宵の首尾を待ち暮す。初心な二人の力競に負ける術を習ひたやと胸臆がせてゐる。短氣な御子フェートンなら西へ西へと鞭て、今の中に朧の夜を伴れて来ようものを、戀叶はせの夜の神のおそきを待ち佗びる胸の切なきたいらくと暮れ難き夕に憶れてゐる。そこえ乳母が今宵忍んで来た時の用意にとてロメオから受取つた繩梯子を有つて歸つて来る。ロメオと云ふ名は誰の口からさくも天樂をさく心地、たよりや如何にさしたやと思へど乳母は他愛もなく泣き悲しんで答へない。焦れて尋ねるも譯がわからぬ。段々と詰問ふてみれば「あのお方

はお死になされましたとばかり繰り返していふ。人手にかゝつてお果てなさつたと悼む。ヂュリエットは氣も狂ふばかり、神さまもあんなまりなと恨めば乳母は神様のせい、でないロメオさまのせいだ。ロメオ様くといふ。

愈々齒搔ゆがつてロメオ様御自害遊ばしたか、それならばそれと答へよと決心の色見せて問ふ。と乳母はあの立派なお胸の上に……

といつて見て来た有様をかたる。

ヂュリエットは今もう耐へ兼ねてロメオ殿と一つ車、一つ柩につて行くと迄に慨いたが、よくくきいて見れば乳母が「あのお方」といつたのはタイバルトでロメオは其の下手人だと明つたロメオが日頃親しかつたわが同門のタイバルトを殺したのだときいては彼の羨しき姿の内に毒を包み。甘き言葉にも針があるのか、と空恐ろし

くなつてくる、がよく考へて見ると清き崇きあのお姿で……罪は矢張りタイバルトにあつたのたろうと思つてみる、と其の人を暫時でも恨み罵つた心が淺間しくなる、其と共にロメオの生存を喜んだがたつた一言のロメオ様は御追放といふ詞はタイバルト殿の千人萬人死んだよりもつと悲しい情ない、たゞ一人のタイバルト殿が死んだ事ばかりでも悲しいは哀しいが禍事といふものは道伴なうて叶はぬならタイバルト殿は殺され……の次へ父様が母様か、さては御兩人諸共におなくなりなされたといふ事についても大事ない。一通りの愁嘆をば懸る計りであつたらうが、タイバルト様死んだといふ其の後へロメオ様は御追放……此の言葉こそ父様母様タイバルト様もロメオ様も此のヂュリエットも皆んな死んだ殺されたといふに同じ事だといつてロメオ追放といふことを死の意味が籠つてると嘆く

愚めかねた乳母は其の夜ロメオを訣別に伴れてくるからといつてロ
 メオの潜伏せるラウレンスの庵へ尋ね行く。ロメオはタイパルトを
 殺して其場の責を負はうとしたがベンボリオが勸告してやまぬので
 ラウレンス僧正の庵に潜むことになつた。僧正はロメオを潜ませお
 いて外に出て風聞をきけばエロナ公の沙汰は追放にあるといつて喜
 ぶとロメオはジュリエットある此の地を去るは死よりつらい。追放
 とは黄金の斧で首を斬るようなものだといつて嘆く。エロナの市に
 居れば犬猫の類も美しきジュリエットの姿を見ることが出来るし、
 蠅の類でもジュリエットが白い腕にとまることが出来、其の唇に密
 と觸れて限りない幸福を盗むことが出来るのに自分は蠅にも及ばぬ
 といつて悲む。僧正が之を慰め諫むる所へ乳母が来て一什を語つて
 今夜の首尾を話す。

そこで上人もいろ／＼すゝめて新婦と訣別の會合をして一刻も早く
 エロナを去つてマンチュアに行きて何とかして日を送つてゐさへす
 れば折を見て此地の吉報せようからといふので其に決する。
 其の夜ロメオとジュリエットとは相逢ふて紅怨語れど盡きぬ別れを
 惜む、舞臺は其の夜の隣方ジュリエットの寢室に二人が別れを惜む
 場になつてゐる。
 別れともない二人、離れともない二人が本意ない別れは人を泣かす
 たどへ捕へられても殺されても泣さへそれを望むなら口惜しとも思
 はぬと迄に哀別の袂を絞る。
 ナイチンゲールと思ひ直した聲は雲雀で夜は明けくる。よはあけ
 近くも次第に暗くなりゆく身の行衛を思ひ啣ちて送に別れかねると
 乳母がジュリエットの母夫人來ると告ぐるに愈々別れる。

別る、際に見上げ見下す面と面。デユリエットは何とやらむ君を墳墓の底に見参す如な心地がするといへばロメオも吾れにもそう見えろが之は悲みの爲めに互の血潮が減つたからだろうといつて。悲しい別れをする。

ロメオの去つた時母夫人は入つて来て娘の涙の面を見て、從兄タイバルトの死を悼む故とのみ思つてるので色々慰める、それから兼ねて話のパリス伯と結婚のことを語る。デ明後日式を舉げるが異存はあるまいといふ。デユリエットは父の獨斷、母の不親切を憤つて不平をいふ、其處へ父カプレットが入つて来て娘の不承知に非常に立腹する。若しパリス伯と結婚するならばよし。父の言に背いて兎角いふなら、怎奈不孝者は子でなし親でなし乞食になつて野垂死するがよいといつて荒々しく出て行く。娘の意思強きに却を煮やして母

夫人も出て行く。

そこでデユリエットはラウレンス上人の外頼る人なしといふので其の庵室を訪ふ、其の先きから來てゐたパリス伯をかへして後に上人はデユリエットと話してみるとデユリエットの決心は仲々に堅くて逆も嫌な結婚をする位なら死ぬの色動かし難いので、それならばといふので茲に一つの計を談す。デユリエットは此の難場を免れられるのならばといふので其の策略を勇むできく。

上人は一瓶の魔睡薬を出して之を飲むと脈搏が止み、呼吸が絶えて死人同様になるが四十二時間たつと蘇生する。死を決して難に處する勇氣があれば今度のことでも父母の意の儘に従つておいて結婚の前夜此の薬を飲むのだなら。家族の者は頓死したと思つて國風に従つて其の日汝を先祖代々の墳墓所に埋葬する。と一方ではマンチユアな

るロメオに容子を詳しく知らして汝の蘇生前に歸らしめ墓を發掘して蘇生した汝を伴れてマンチユアへ二人逃げて行くがよいこのことにヂュリエットは大に喜んだ、そこで今迄の不幸を侘びて父母の前を繕つてパリスと婚儀を上ぐるについても承諾したので父は喜んで結婚日を明日に繰上げるといつて立騒いだ。ヂュリエットは寢室にあつて人を遠ざけ騒ぐ心を押し静めて薬を飲むと何事も知らず、昏々として夢の世界へ落ちる。計は圓にあたつてヂュリエットは涙の中に葬られた。

マンチユアのロメオの所へは豫ねて信頼せる家僕のエロナから使に來てヂュリエットの頓死を報じて來た。既に埋葬されたこのことがラウレンス上人から何とかの便ありそうなものど待つてもない、がどうやら妻の死は事實に違ひないので今更らに望みも楽しみもなき

身を長らうる要はないと強激なる毒薬を購ふて馬でエロナに歸り忍んでヂュリエットが墓地に入り込むのは深更であつた。デ伴の僕に父への遺書を托しておいて自分は墓の前に至つて發掘して入口を押開けた。

此の前からパリス伯は戀しき人の死を悲むて香花を其の墓に手向けるのを切めてもの心やりにせんと思ふて墓參してゐる處へ人が來たので隠れて覗つてゐると追放中のロメオが墓を發掘しつゝあるので大に怒つて茲に二人の仕合となりパリスはロメオに殞されるパリスは苦しき息の下から情あらば我が亡骸をヂュリエットの傍に横へ呉れど頼む。其の時今日結婚の噂ありしも思出すが何れは不幸者といふので頼まれし通にしてやる。それからロメオはヂュリエットの傍に坐して眠れる如き其の姿を見て耐へぬ嘆きの接吻をしてから毒を仰

いで死ぬ。
 ラウレンス上人は番僧デヨンといふのを使にしてロメオに手紙を持
 たしてやつたのが歸つて來ぬので待ち侘びてゐる所へデヨンが歸つ
 てきて昨日命を承つてから友達と同行せようと思つて其の友達の行
 方を探ねてゐる内、ある病家に寄つた所が檢疫官に捕へられて拘留
 せられ今し方放されましたとて手紙を返したので上人の驚は一方
 なく、デユリエットが蘇生も間もないから今は一刻も猶猶しては居
 れない、さうでも自分について墓を發いてデユリエットを伴れ歸り
 時機を見てマンチュアへ送り届ける外はないと用意して墓地に來る
 とロメオの家僕が居るのに遭ふて驚いて至つて見るとロメオはデユ
 リエットを抱いたまゝ死んでゐる、其の傍にはパリス伯の死骸もあ
 る、其の内にデユリエットは蘇生する。

デユリエットがロメオを呼ぶのを制して其處で天命を説く、其の時
 に人の來る氣色がするのでデユリエットにも出よといつたがさかぬ
 ので仕方なく上人一人出る。
 デユリエットはロメオの手に毒を飲むだ餘りもと覺めたがない。唇
 についてる毒でもと思つてキッスしても仕方がない、とう／＼ロメ
 オの短劍を見付けて胸を刺して自殺する。
 之より前ロメオが來た時、パリス伯の召連れた小姓は伯が何者かと
 格闘するのを見て夜番に告げたので夜番長は墓地の内外を搜索し始
 めた。第一にロメオの家來が見付かつたので捕へた、と其處へラッ
 レンス上人が出て來たので之をも捕へた。一方にはゴロナ公に此趣
 を報じ。カブレット、モンテীগ兩家へも急報したから何れも出て
 來る。

此の時にラウレンス上人の物語りとロメオが僕に托した父への手紙

によつて前後の事情は明白となる。

可憐なる少年少女は兩人の父が家の年來の宿怨、解くるの日なかつた確執の犠牲となつた、愛息愛嬢を失つた兩家の父は此の天罰に我を折つて互に握手し。モンテীগはデユリエットの黄金の記念像を建設せようといへばカブレットもロメオの像を同様作るとなり茲に兩家和解して哀れなる戀物語は局を結んだ。

中期の史劇

△ヘチャード二世 英國處女王エリザベスの嬖臣エッセックス伯のことに ついては前に叙べてたが丁度エッセックスが事を擧げる前日に廢位の前祝として例のグローブ、シアタに於て此の劇が演せられたことが記録にのつてゐる、デ此の劇の作者については恚奈ことか

ら疑を抱いてるものもある、それは別として之をリチャード三世に 踵いで書いたものらしい。材料はホーリンシェットの年代記から採 つたもので、それに脚色を施したものだ。その初版には國王廢位の 場がないが之は時の女王に遠慮して除いたものだ。

△ジョン王 エドワード四世の頃非常に熱心な新教信者で盛んに宗 論を開いて廻つた僧正ペールといふ人があつた。此のペールは獨逸 人キルヒマイエルのハウマキウスから筋を探つてキングジョハンと いふ劇を書いて大に舊教を攻撃した。それはジョン王がローマ法王 の爲めに破門せられ終に毒害に遇ふといふ慘事を骨子にして法王黨 の我儘を痛快に罵つた悲劇的分子を含むでる年代紀劇だ。其の後千 五百九十一年に教訓的意味をもつた古劇で、ゼ、トラブルサム、レ ーン、オブ、キング、デヨンといふのが出た。沙翁は即ち之によつ

て此の劇を作つたものだ。其の着想も結構も共に傑出した作であつて。王を初めとしてコンスタンヌス、フォルコンブリツヂなどは如何にも痛刻に描かれてゐる。シェイクスピアは此の劇に於て性格描寫には随分骨を折つたらしい。或る學者は此の劇を第二期の冒頭に置くものがある。それといふのも此の劇が凡てに於て勝れてゐるからだろう。之を要する第一期は修養の時代であつて。一面即ち改作翻案の時代であつた。

ラブス、レポーアス、ロスト、錯誤の喜劇等に於て輕妙なる筆を弄して洒落なる其の想を叙べ、ロメオとジュリエットに於て青春の燃ゆる情熱を南歐の戀物語りに寄せて陰に悲劇創作の土臺を作りリチヤード二世に至つて史劇は初めて体をなし。ジョン王に至つて漸く

熟して來て其の頭角を現はすに至つた。

第三 得意時代の院本 (第二期の戯曲)

都に出てから幾年。随分と苦勞をした丈の甲斐あつて今ちや大分名も知られて來た地位も相當に得た。生活に追はれることもない。此の時にシェイクスピアの精神は愉快に満ちてゐる。花やかな都の住居も面白く、往來ふ人の面も何となくつかしい時代だ、分別もある思慮もあるが幸運の星の光に導かれ行く楽しい時代には泣くうと思ふても泣けるものでない。恁奈時に出來た。作は多くは快活で愉快なものでなければならぬ。即ち第二期の詩人の作は喜劇を主としてゐる。其の技巧も進歩してゐる、其の經驗も出來てゐる。快活な都の人にも多く交際をして來た。それ等は何れも此の期の作の上

に於て著しく現はれてきた。史劇にしても此の時代のものは真に悲劇でない。却つて涙を笑ひに包むで終るようになる。出て来る人物は何れも邪氣のないものばかり。婦人などでも利發で快活で物事に熱心で前のような頑強邪惡な点がない。よく語る、はいやいだ。生々とした女が多い。

右に左に此の時代は詩人が其の暢々とした愉快な心持ちで面白く筆を執つた時代で其の作は何れも一層の進歩を示してゐる。

中期の喜劇

△ヅエエヌの商人 此の劇の筋は何から採つたかわからない。が之について色々な説がある。といふのはそれまでにこれに類似の話が澤山出てゐるから果して沙翁が何れに據つて筆を執つたかは一寸とわかりにくいのである。兎に角此の話は當時の國民の間に喧傳せ

られてゐたから。沙翁は探つて以て自家作中のものにしたものだらう。けれどもマローの書いたジュー、オプ、モールタは興つて大に力あつたものだらうと思はれるから今其の梗概を書いてみよう。今は昔地中海の一孤島モールタの一市にパラバスといふ猶太人の高利貸があつた。もとより猶太人のことだから慳吝にして飽くことを知らない。家には巨萬の財産を有つてゐるが依然高利を貸して不當の金を儲けてゐる、或年にトルコの軍隊が此の町を攻めた、そして全島を占領せよとした。デ先づ初めに澤山の金を貢げと要求した。モールタの島の太守は拒絶したい、そんな要求は容れたくはないけれども聞ねば戦をせねばならぬ、何やらには巻かれよのたとへ泣く兒と地頭には勝たれぬ。戦をすれば敗けるに定まつてるのに金を出さぬといふ譯にはゆかぬ、よろしい貢ぎませうと答へはしたものの、

金の出所がない。仕方がない、之も島の爲めなりゴ互の爲めだ。あつて島内の富豪に命令して各其の資産の半分を献せしむることになつた。金を出せといはれたら誰しも嫌だ、殊に半分も出せといふのだから随分酷い、甚い其處には曰はくがある。たとへ命令してもおいそれとは出しますまい。それには手段を講ぜねばならぬ、といふので若し財産の半分を献納することをきかないものは無理やりヤソ教に入らせる。それでもきかぬものは其の財産全部を嶋の政府に没収するとの布令を出した、元より其處には魂膽があるのだ。恣奈非道な命令が眞面目に出された日には耐つたものでない、が常日頃餘りに強慾なバラバスを憐めてやるは此の時といふので實はバラバスの財産で今度の災難を脱れようといふ蟲のいい話なのだ。名前は實に立派だ、國家存亡の秋だ。島内の富豪は進んで此の危難を救へ

といふのだ。否押し付け往生に頭からの命令だ。が其の裡面に恣奈目算があつて見ればどうせ眞面目な布令ではない。其處には不正な点がある、偏頗な角がある、當然であつても奸手段を弄して其のお托宣から脱れようとするバラバスがどうして黙つてゐよう。が一方には權威がある、是が非でも斯うと言ひだしたからには遣り遂げねば承知せない。法令の力の前には遣がのバラバスも服せざるを得ない、得ないが。たゞ其まゝに有り難くお受けをせよう理のものでない、島政府は愈々法律の力で以てバラバスの財産を没收して終つたと共に其の家を尼寺とした。而しバラバスは何地までも猶太人である。猶太式の奸手段は暗に廻らされてゐた、形勢既に定まつた時バラバスは其の財産の大部分を早くも寺内に隠した、之を知つた官憲は黙つてゐない、がその前に隠した財産を奪ひ出そうとしてバラバ

エは其の女アビゲールを尼にして寺内に入らしめた。女のアビゲールは花の如に美しい少女だ我慾に満ちた父には似もやらぬ温雅な性質の女である、此處に島の太守の子にロドヅキコといふ若殿原がある夙くもアビゲールを垣間見て戀々の想を焦がしてゐた。アビゲールも亦ロドヅキコを憎からず思つて陰に洒瀟たる小公子の姿を胸に描いてゐた。さりとは知るや知らずやエロスの童神が戯れの征矢は年少紳士アチアスといふ者の小胸に傷を負はして戀ある少女を忘れ兼ねるに至らせた、之を知つたパラバスは奸惡な本性を出して陰獐なる微笑に獨り何事をか割策してゐた。

頓て貴公子ロドヅキコと年少紳士アチアスとは互に決闘状を受取つた。元より其の決闘状は偽筆である、二人は相戦つて共に戀の祭壇の犠牲となつた同じく殞れた。思ふ笑盡に入つたパラバスの嬉びに

引きかへて。之を知つたアビゲールの痛恨は何程だつたらう、ロドヅキコは意中の人である、アチアスとても自分を慕ふ優しの人であつてみれば憎くはない。其の二人は父が殘虐の手に非業の死を遂げた。父とは雖も恨めしい、憎い、腹がたつ、骨髓に泌み込むだ此の憤恨、戀を失つた此の哀怨、何として忘れられよう。情ない。餘りな………と思ひかけると耐らない。氣も狂亂になつて父の奸策の一伍一什を寺僧に告げる、と共に花の如きアビゲールは父が強慾の牙にかゝつて毒を仰いで死んだ、鐘愛する女の死も鬼の如きパラバスの眼に涙を呼ぶにはあたらなかつた。冷酷なる猶太人は此の痛恨事に處して心を動かさるゝ事はなかつた。パラバスは女が死際に奸計を寺僧に告げたことを知ると再び手段を施して其の寺僧をも殺した斯くして血も涙もないパラバスは又も富有の人となつた。

其後パラバスは奴僕の爲めに其の密謀を曝露せられ城壁數仞の上から投せられたが悪運強き彼は死に至らなかつた。其内にトルコ兵がまたもモールタの島を攻めて來た。彼は賣國奴となつて敵軍の案内をした勝利の曉には太守となるべき約束をしてトルコ人を城中に導いた、斯くて太守以下は難なく生擒せられた。が飽くことを知らぬパラバスは此の時陰に考へた。たゞトルコ人に従つて一時の功に酬はれるだけで満足してゐるなどは面白くない。それよりは計策の施すべきを行つて自ら永くモールタの太守となるのが一層愉快であると思ふと共に茲に今迄の意嚮は一變した彼は私にヤソ教徒と謀つてトルコ將官告別の宴席に於て一舉にしてトルコ人を廢殺にせようとした。その行爲を憎み其の意のある所を知つてゐるヤソ教徒は彼の甘言に偽られたるを知らざる如に、伴つて彼の舉を讃した。神なら

ぬ身のそれとは知らぬ。悪運將に此期に於て盡きんとしてゐるぞとは知らない彼は早や策成つたかのように大言して喜んだ、而しながら、してやつたりと心に笑つてゐた彼は却つてしてやられてたのだ待ちに待つた時機は來た、イデ此の時………に策を施そうとしても、もう遅い、策謀の裏をかゝれてゐると夢知らなかつたのが命運の終で合圖のラッパ一聲。コ、ハ何事と驚き狼てる暇もない。身は忽ちに床下の陷窟に落ちて非業の最後を遂げた。斯うして強慾非道の猶太人パラバスは財寶の前には凡ての罪惡を敢てしたが我愆却つて身を敗るの因となつて、女を失ひ、財寶を奪はれ。遂には自己の生命をも之が爲めに棄つるに至つて尙ほ悔恨の涙なく。惡鬼の如き邪惡の想を抱いて死に至るといふ筋だ。今之に對して彼是多くの議論をせぬ。がユダヤ人を人間扱せなかつ

た當時の思想に對するバラバスの呪咀と怨恨が彼をして野獸にもま
 して冷酷な人とならしめたことを思はねばならぬ。
 沙翁のベニス商人も之に刺激され、之による處大であつたらうと
 思はれる。而しセークスピアのマーチャント、オブ、ヴェニスの中
 シヤイロックをバラバスに較べると餘程音なしの点がある、が要す
 るに沙翁の作とマーローの作とは其の精神を同じうするものだとい
 つてよい。尤も其處には相異の点も澤山あるが沙翁のヴェニスの商
 人の筋は普く我邦にも紹介されて、中小學生も尙ほよく之を知つて
 るから敢て此の處に書かぬ、他は讀者の研究に任すとせよう。

後期の史劇

△ヘンリー四世(第一、二篇)筋をホーリンシェットの年代記の儘
 に取つたもので滑稽の文句が澤山あつて沙翁の作中で最も人を笑は

すは此の作といつてよい、殊に要部に散文を用ひたのは此の劇が初
 めである、さきのリチャード二世の後を仕組むたもので事實はそれ
 と関連してゐるけれども前日の史劇のように悲劇の性質を含むでな
 いで却つて喜劇に近い。リチャード二世では英資敢勇だつたポーリ
 ンブロークが此の劇では位に即いてヘンリー四世となつて年を取つ
 て今更らに王威を振ふことが出来ない。其の上太子は有名なるフォ
 ールスタッフと共に遊蕩に身を持ち崩して紅燈緑酒の間に日を送つ
 てるので老衰して王威地に墮ちた國王は望なき暗さに沈吟する有様
 である、此のフォールスタッフはセイクスピア第一の滑稽な人物
 で最初は舊劇によつてオールドカッスルと命名したが其の苗裔の抗
 議によつて此の名にかへたのであるそうなる。此の劇の出来たのは事
 實に徴してみると多分は千五百九十六年から八年迄の間だつたらう

△ヘンリー五世 前のヘンリー四世の後である。即ち前者に於て酒地肉林に明け暮れを送つた太子は父王の後を嗣いで自ら位に即きヘンリー五世になると共に空なる快樂に耽つてた今迄の行爲は斷然と之を改めて墮落せる王威を再び盛にするに至るのだ。外征の壯舉は國民の輿望を集め進むで凡ての事を敢行するのは王の能事としてゐた所であつたのだ。

此の劇の第三幕の第四場には佛文が大部を占めてるので他に筆者を免むる者があるけれども格別とるに足らぬらしい。筋は矢張前者と同様此の劇もホーリンシェツドの年代記からといつたものである。

後期の喜劇

△ターミング、オブ、ゼ、シユル 此の劇は舊劇エ、プレザント

コメデー、ワールド、ゼ、ターミング、オブ、エ、シユルを翻案修正したものだろうとのことだが。何から取材したものか判然しない。而し、ピアンカドリユーセンシオとの挿話は詩人がスコイン英譯、伊太利大劇曲家アリオスト原著サツポーセスの内から採つて新に沙翁が加へたものだろうとのことであつた。人物も他の劇の如に王侯は出てゐないで凡て中等社會の者である。或者は之は沙翁の作でないといつてゐるが的にはならぬ。年代も色々といつてゐるが先づ千五百九十七年頃だろうとのことだ。

△ウキンゾアの樂しき女房達 愉快な喜劇でエリザベス女王がヘンリー四世の劇を見て其の續編として沙翁に命じて作らしたのが此の劇だとの傳説がある、筋はタールトンのニユース、アット、オブ、バーゲートリー中のゼアラブアース、オブ、ビザから採つたもので

女王の命を奉じてセークスピアは十日に之を書き上げたといふことである。

△マツチ、アヅー、アバウト、ナツシング。マツチー、アヅーの眞鍮なる部分は筋をバルデルロの傳奇に採つたのだがベネディック、とピートリースの論争は沙翁の創作である。文雅軽快な喜劇であつて滑稽も實に自然である。

△御好み次第 其の當時世間で持て囃されてゐたロツジのローザリンドから筋を採つて自己薬籠中のものとしジャック、タツチストー、アウンレー等の人物を加へて作り上げたものだ。之は前のマツチ、アヅー、アバウト、ナツシングと前後して出したものに違ひない、之も高尚典雅なる喜劇である。

△第十二夜 此の劇の筋は伊太利喜劇インガンニによつたのたろう

ぎのことだが中には自作の歌曲外に流行の歌も混入してある、マンニンガムの日誌によれば十七世紀の初年にミツドル、テムブル、ホールに於て初めて演せられたとあるから作つたのも其の頃に違ひない。

△オールウズ、ウエル、ザット、エンズ、ウエル 此の劇は沙翁が第二期より三期への過渡期の作でミアスの所謂ラヴス、レーボアス、ソオンに據れりとのことだ沙翁一流の滑稽人物は讀まれるが今迄の軽快なる趣は少なくて沈鬱なる分子が多くなつてゐる。

△メジュア、フォア、メジュア 此の劇の筋はクリンチオのプロモス、エンド、カツサンドラ譚から採つたものだが此の劇中の有名な小歌は當時の流行歌である。記録によれば千六百四年の下流にホイット、ホールで演せられたとあるから何れ其の前年頃の作だつた

ろうとのことだ。此の劇には愈々詩人が荒める當時の心理が何地やらに現はれて来て印象が何となう陰鬱になつてくる、寧ろ悲劇の分子が多く含まれてるといつてよい。

△トロイラスとクレツシタ此の劇はトロイラスとクレツシダの話へクトルの話アジャックス、ユリッセス及ギリシヤ軍勢の話等三つの話が雜つて、各作つた時が同じでない。トロイ戦争を歌つたものは之までに澤山あつて世間には普く唄はれてたのだが沙翁はチヨースの詩篇に據つて脚色したものらしい。序曲と第五幕は詩人の筆でないとのことである。之も同前の暗き色を帯びて、動作は單一を缺いでゐる、畢竟詩人が成功の作ではなかつたらしい。

右の内終りの三篇は沙翁が漸く内心の沈思に傾きつゝある頃の作で

中期悲劇と同時代に作られたものだから韻律も次期の調を帯びて來てるし快活なる分子少なく沈痛の点多いから年代からいつても第三期に入れるべきであるが、ドーデン博士は對照の便を圖つて第二期の終りに入れてある。

要するに此の期の作はセークスピアが非常の勢を以て凡てに於て向上發展しつゝある得意時代の作であるから。一体に暗れやかな愉快なる印象が多い、而して其の技巧の点に於ても圓熟して來たし、境遇の然らしむる所以か性格描寫も圓満で前よりは長足の發達をしてゐる。

第四 思索時代の院本 (第三期の戯曲)

セークスピアが第一期の作は豊腴なる思想と華麗なる辭章とを

以て幾多當時の作者の中に其の頭角を現はしかけた所謂終極の時代であつた、第二期に於ては漸く圓熟し來たりし辭想を以て遺手に帆かけて走る幸運の兒が快活なる希望を歌つた所謂喜劇の時代であつたが。人生の春に落花の怨みありで長閑であつたシエクスピアの前途に當つて時ならぬ狂瀾怒濤は渦巻き起つた、家族に不幸事打ち續いたと共に彼の恩人の一族に悲惨事の起つたのは即ち沙翁をして。頓て傑作時代に入らしむる起因であつた。

赫灼たる希望の光明に坦々たる進歩の一路をひた走り馳せてゐた彼れ詩人は忽ち行途にあたつて陰雲一簇湧き出づるのを見て驚いた現世の快樂に油を流したような静かなる人生の春の海に棹して面白き歌を唄つてた彼は暗き世界の荒れ狂ふ海あるを知つて戰いた。紺碧の海の底には億劫の秘密の包まれてゐて其處には強き速き黒潮の

流れあるを覗ひ知つては歎歌ゆたかに遊山氣取の春氣な騒ぎではな
いと思つた。

百花綯繡たる園に蛇住める世なりと知つて戰き。艶美の花に凋落の
涙あるを覺つては現世の怡樂も頼みがたきものだと悲かすに居れな
い華やかであつた希望の星暗くなつて晴れやかな心の曇り拂はんに
由なくなつた時、今迄外面のこのみしか見なかつた詩人の眸は仇
なる現世の色から離れて内に向かざるを得なかつた。

斯うして思索時代に入つたシエクスピアは深くも情性の秘奥に
探ね入るのであつた。斯様に心裡状態の變化したことは頓て其の作
に於ても著じるしい轉移あることを認められる。今迄は愛戀、友誼
愛國心等を題目としてきたのが此の期に入つてからは沈痛深刻なる
題を採ぶようになつた。ポートルート、ペーリチングに妙を得たる

シエークスピアが幽奥なる辭想に接して其處にはペーエンのノバム、オーガナム中に存する悟性に匹敵すべき智識ありと叫ばしめたのも此の期の作である。ゲーテの所謂水晶の文字板を有する透明なる時計の如き幽妙なる描寫も此の時代に於て多く覗ひ見ることが出来る。

シエークスピアをして人類不朽の大紀念を作らしめたのは此の時代の作である。技巧は圓熟して變幻涯りなき人情の機微を穿ちて餘す所がなく。人をして惻痛なる印象に深く考へしむるのは此の時代の作である。

中期の悲劇

△シエーリアス、シーザー シエークスピアは此の劇をノースの譯ブルタークの傳記から取材して作つたことだが絶代の英雄シ

ーザーが悲惨なる最後を唄つた悲曲は既に多くの作家の題材に上つてた。が沙翁また此の老雄が運命に多大の感興を持つてたことは彼の作を通じて明らかである、此の劇の年代については臆説測斷をなすもの多いが千六百一年の作といふのが正しいらしい。

△ハムレット シエークスピアの名を口にするものは必ずハムレットを語るといふ位詩人の作中最も有名なもので各國語に最も多く翻譯せられてゐる、此の筋はサクソ、グラムマチクスの丁抹史に見えてるが詩人は舊劇によつて作つたものだらうとのことだ。此の劇は異版が多いが出版は千六百二年であるとなつてゐる、彼の作中でアントニーとクレオパトラを除いて一番長いものである。

今其の梗概を紹介すると

先王は毒蛇に刺されて崩御遊ばしたのだといつてゐる王弟クロード

イアスは丁抹王が不思議の死をせられてから程なく女王ガートルー
 ドと結婚した。王子ハムレットを措いて位を嗣いだ王弟クロードイ
 アスは前王の譽れ高かつたのに引きかへて餘り評判がよくなかつた
 丁抹の天地が何となう暗くなつて民心落ち付かないのを見て王子ハ
 ムレットは少なからず心を傷めた、先王の死、王妃の再婚、それは
 ハムレットが小さき胸を惱ます因であつた。儘ならぬ世の汚れ憎む
 べき人心。扱ても味氣なの世に生歎死歎心迷へば身一つの置き場所
 もない程に苦るしい。切ない想ひを九寸五分に断ち切るは易いこと
 だが迷へば今更らに來世の苦難も空恐ろしい。惱み悶ゆる胸の悲さ
 は日毎夜毎に募るばかり。返すくも王妃の不倫が腹立たしく叔父
 君の仕打ちが氣に喰はぬ。
 時に王城の畔には鐘の音陰に沈む夜毎々々、昔ながらの甲冑をつけ

た先王の亡魂淨み兼ねて娑婆の妄執晴れやらぬ怨の姿哀しげに願は
 るゝどの噂がはしなくも王子の耳に入つた。先王毒蛇に刺れて亡せ
 給へりといへど、ありし事共綜合すれば毒蛇とは……もしやの疑念
 解けやらぬ身に、愈々深くなつた王子は一夜城門の外に銀甲昔なが
 らに儼として。あわれなつかしの先王が亡靈に相遭ふことを得た。
 其後王子は王の侍従ポロニアスを殺し狂氣を装つて父王の仇を酬
 ひんとした。ポロニアスが娘オフィリアは逆運の公子が戀人であ
 つた花美しの乙女子である。たゞ君の爲めに妾が百年の命もと思ひ
 思はれた仲である。王子の狂氣は伴りの狂亂だと知る由がない。
 戀しき人は一朝の苦悶に心狂へるの人となつたと思ひ詰めてる柱と
 頼る父は吾が情人の手に非業の死を急がれて今は此の世に望みも慰
 めもなき身と思へば小さき少女心のなじよに狂はずに居れよう。花

の如き可憐の小娘は空なる世にある幾時を甘き戀の節辛き嘆きの唄うたひつゝ多くの人が憐憫の涙の内河に入つて父の後を追ふた。と丁度フランスに居つたオフィリアの兄は父の仇。妹の敵は……と血眼になつて王邸へ暴れ込む所でクロードイアス王に操られてハムレットを怨む。ハムレットは王の忌弾に觸れて英國に送られ往く途中海賊の爲めに故國に送り返された時、オフィリアの兄レリアルタイーズが重なる怨恨を哀愁の胸に包むで妹の亡骸を葬らんとする葬儀に出逢ふた、敗れたる身と魂との前途心細き想に急げる折とて。吾れ故に儚なく逝きし戀人を偲べば堪へ難くなつて吾れも共に……亡き人の後追ひたやと心の限りを聲に出した、レリアルタイーズは仇に逢つた、悲劇は將に演せられようとして收まつた。が邪魔者のハムレット歸へれりときいた新王クロードイアスの胸は收ま

らない。名を試合にかつて美しき情の蔭に牙を磨いてハムレットを亡き者にせようとした。新王はレリアルタイーズに毒ある劍を與へて殘虐非道の試合をなさしめた。ハムレット其の日却つて敵手の毒劍を奪つて之を刺すや王妃は毒を煽つて死んだ。王妃の死とレリアルタイーズの奸策曝露によつて怒心頭に發したハムレットは驚く王を毒劍に刺した、宿怨茲に雪がれて哀れ最とも拙なかりし運命の王子が身の終りは即ち此の劇の大團圓になつてゐる。弱きは女心。王妃はハムレットの命運を咒ふた。行け、行け、尼寺へ呪はれたる戀に近きしオフィリアの眞實は然かもハムレットの心の傷を洗はずして止まなかつた。「父上の亡靈が甲冑にて？」ハムレットの胸は沸え返つた。と共に胸に浮ぶは「チエ、淺間しいわい」「チエ、情なや」「たつた一月」た

つやたゝすに………脆きは女。さりながら恨は骨髓に沁み渡つて………。詩人の筆に萬人を泣かしたのだ。
 ハムレットの臺詞諸他人の言葉を合はしたよりも長いのは沙翁の最も深刻なる同情を以て描寫に力を注いだからだろう。
 尙ほ此の劇中にてポロニアスの滑稽と穴堀の談話とは讀者の沈鬱を慰せんが爲めに加へたのだ。

後期の悲劇

△オセロ 此の劇も夙く我邦の讀書界に紹介せられてゐて其の筋は誰でも知つてる。シエークスピアは材をクリンチオのヘカトムミチ中の話から採つたものだ、又食人族などの話はサー、ウオター、ロレーのギニア發見から得たものだ。
 オセロはムーア人である、男らしい男である、武士らしい武人であ

つた。功をベニスの朝廷に建て、適れ男を磨き上げた。

貴族ブラバンシオの姫君デスデモーナは時の小公子達を随分と騒がせたものだ、美しく優しく崇高い心を持つた姫は婚姻の話聞かされてさあ、うら恥しさに胸をワクつかせて面紅むる處女である、浮かれ男は多く姫の美しい姿に燃然やして。ならば戀の仇浪寄せ狂ふ渦巻きの中に姫を誘はんと焦せる、中にもロ德里ゴといへるにやは男は富も名も棄て鉢の生命までもと切ない想に身を獲してゐる。而しながら見るからに猛きムーア人のオセロは清く勇ましくも亦哀れなる物語を其の前半生に持つて居る。優しき都の公達が空なる言葉の華には迷はなかつた姫も猛き武士が勇ましの身の上話には言ひ知れぬ嬉しさと懐かしさを覺えて果ては姫蕩の身も魂も任さん人はたゞ此の君との想さへ起つた、男々しきは。武夫の常ながら脆きは

猛き男兒の情、迷に語る心の丈の長き後の世かけて何日しか契つた二人の戀は實に美しかつた。

オセロとデスデモーナ。一つは武骨一片のムーア人、他は花廳はしの姿に若き公達の心の駒を狂はせた都の貴族の姫御前。エロスの惡戯を笑ふ公達の胸には嫉妬の角も生えたるうが。二人の戀は實に濃であつた。

オセロの武張つた手に牽かれてデスデモーナが父の家を脱け出でた其の夜悲劇の幕は切つて落された。

オセロの部下の旗手にイアゴーといふのがあつた。其の妻にエミリアといふのがあつた。

オセロの副官にカシオといふのがあつた。

ロ德里ゴは猶ほも蛇の如く執念くデスデモーナをつけねらつてゐ

る、イアゴーは常にロ德里ゴの胸の焰を煽る。

土耳其との戦にサイプラス島の守備を命せられたオセロは勇ましき門出をする。イアゴーは將軍の親任を用ひて愈々奸策を弄する。ロ德里ゴーはイアゴーの煽るがまゝに戀の亡者となつて何處までもつ

いて行く、カシオはイアゴーが嫉妬の地位にあるを知らずして遂に其の惡手段るワナにかゝる。オセロは一旗手が毒あめ甘き言葉に迷はされる。

戀の乙女デスデモーナは嫉妬の犠牲となつて非業の死をなす。

イアゴーが三寸の舌端に咒はれた人々の命運の繩は此處に解ける葛藤釋け來つて初めてイアゴーの奸策を知つたオセロは痛恨の情に

耐へかねる。遂に自ら相果てるに至つて悲劇の幕は閉ぢられる。

斯うして一徹の武人の戀の悲劇は詩人の彩筆に染められて久遠に情

の子が同情の的となつた。
 而しセークスピアは前に記した如く材は他から得たけれども其處には詩人の大手腕によつて一篇を最も美しきものとしたりたことへばデスデモナの死状の如き原本にてはイアゴがオセロの命を奉じて陰に之を殺した後屋根の梁を下して過ち死せるの体に装ふたことになつてゐる。オセロの最後にしても原本では一度は牢獄に囚はれデスデモナ一の親戚の手に殺される。イアゴの如きも原本では拷問の苦しさに堪へて事實罪状を自状して悶死することになつてゐる。が詩人の靈筆は之等を化して遂に不朽の悲壯物語をなしたので。
 △リア王 此の劇の筋は多くの年代記及其他の史傳にも出てゐるがシエクスピリアはホーリンシェットの年代記から取材したのでらうとのことだ。グルースター父子の挿話はシドネーのアーガチアに採

つたのだ。
 一代專制の君。リア王が三人の娘の親切を耳にきい分けようとした時。邪なる心を言葉に飾る姉二人のお世辭を腹たしく思つた。
 コーデリア姫は父王の空なる心が悲しく思はれるので人の子の親思ふ程は妾も事へ參せんと花も實もない返事をした。一度は耳を疑つたりア王も誇り迷へる心に姫が胸の切なさを察することは出来ないで恐人が諷刺。ケント伯が苦諫を退けてコーデリア姫を勘當したと共ニケント伯をも放逐した、巧言令色父王の意を嚮へた姉二人は王土を分けて貰つた。其の時來てゐたパーガンデイー公は姫の心酌み兼ねて歸つたがフランスの王はいじらしいき姫の心の崇さに厚き情を掛けて涙乾しあゑぬ姫を伴れて國にかへつた。
 憎むべき言葉の華に迷ひ。王が二人の姉妹の本心を覗ひ知つて憤恨